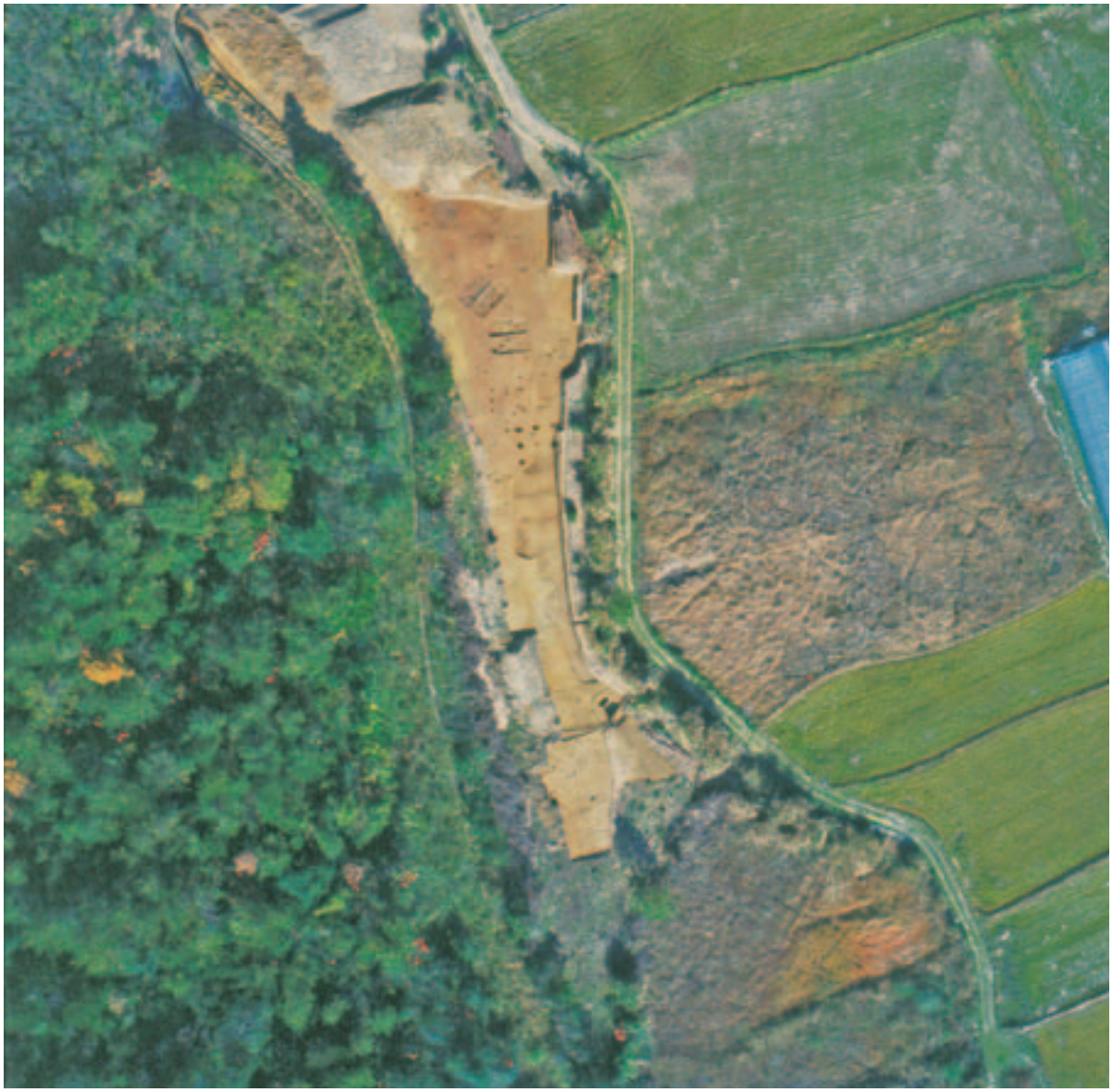
長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡

行橋市文化財調査報告書　第 39 集

２０１１

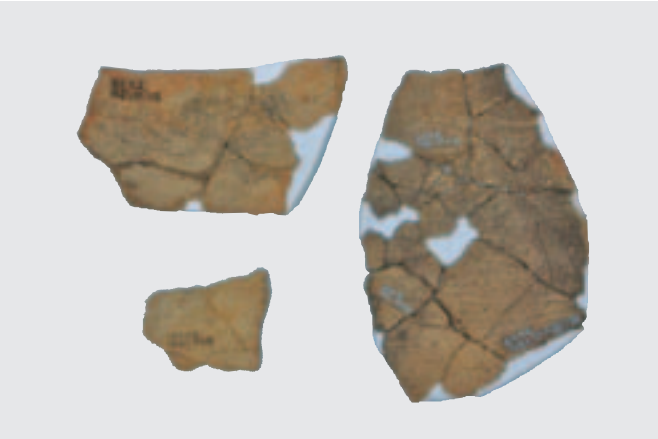
行橋市教育委員会

長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡航空写真（真上から）



１．長井丸尾遺跡航空写真（真上から）

２．長井丸尾遺跡出土縄文土器（外面）



３．長井丸尾遺跡出土縄文土器（内面）

序

本書は、平成 16 年度に、基盤整備促進事業（長井第二地区）の工事に先立ち実施いたしました長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡の発掘調査報告書であります。

今回の調査では、長井丸尾遺跡において、行橋市内では大変珍しい縄文時代の竪穴住居跡が発掘されました。また、古墳時代のオンドル状のかまどを持つ竪穴住居跡が確認され、朝鮮半島との交流を考えるうえでも、貴重な成果を得ることができました。この調査の記録が、縄文時代や古墳時代について研究し、また、地域の文化財に対する理解を深める上で、役立てていただけるものになれば幸いに存じます。

調査に際しましては、地元長井地区の皆様をはじめ関係各位に、ひとかたならぬご協力をいただきました。ここに、深く感謝の意を表します。

平成２３年３月

行橋市教育委員会
教育長　山田　英俊

凡　　例

1．本書は福岡県行橋市大字長井字尾ノ花 899 番地ほかに所在する長井尾ノ花遺跡及び長井丸尾遺跡の発掘調査報告書である。基盤整備促進事業（長井第二地区）に伴い、国・県の補助を受けて平成 16 年度に発掘調査を実施した。
2．調査は行橋市教育委員会が主体となって行った。調査組織はＩ－３に記す。
3．遺構の実測は田中 すま子・今村 美香・島木 邦子・中島 裕子・北本 悦子・工藤 祥子・佐藤 愛子・谷口 貞子・古木 初子・伊藤 昌広が行った。
4．遺構写真撮影は伊藤が行い、航空写真撮影は九州航空㈱に委託した。
5．遺物の水洗・註記・接合・復原は橋田 孝子・佐々木 豊子が行った。
6．遺物の実測は、土器については奥野 康代・鎌田 尚子・松本 まゆみ・伊藤が行い、石器についてはデジタルトレースも含めて㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7．遺構・遺物図面のデジタルトレースは奥野・河野 竜二が行った。
8．遺物写真撮影は伊藤が行った。
9．遺物観察表に使用した色調の表記は、小山 正忠・竹原 秀雄『新版 標準土色帖 1995 年後期版』による。
10．本書に使用した遺構図の方位は磁北である。
11．調査で出土した遺物・図面及び写真は、行橋市教育委員会において保管している。
12．本書の執筆・編集は伊藤が行った。

本文目次

カラー図版
序
凡例
目次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
　3　調査体制 …… 1

Ⅱ 位置と環境 …… 3
　1　地形と地質 …… 3
　2　周辺の遺跡 …… 3

Ⅲ 調査の記録 …… 7
　1 長井尾ノ花遺跡の調査 …… 7
　　（1）竪穴住居跡 …… 7
　　（2）土坑 …… 9
　　（3）その他 …… 9
　2　長井丸尾遺跡の調査 …… 9
　　（1）竪穴住居跡 …… 11
　　（2）掘立柱建物跡 …… 16
　　（3）竪穴 …… 17
　　（4）土坑 …… 18
　　（5）ピット出土遺物 …… 19
　　（6）表土他出土遺物 …… 19

Ⅳ おわりに …… 22

写真図版
報告書抄録

挿図目次

図１　基盤整備促進事業（長井第二地区）区域及び試掘坑配置図（1/6,000）…… 2
図２　京都平野の地質図（文献３より，1/100,000）…… 4
図３　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 5
図４　長井尾ノ花遺跡遺構配置図（1/300）…… 7
図５　長井尾ノ花遺跡 竪穴住居跡・土坑（1/50）…… 8
図６　長井尾ノ花遺跡出土遺物（1/3）…… 9
図７　長井丸尾遺跡遺構配置図（1/300）…… 10
図８　長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１（1/50）…… 12
図９　長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１出土遺物（1/3）…… 12
図 10　長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２（1/50）…… 13
図 11　長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２出土遺物（1/3，1/4，2/3）…… 14
図 12　長井丸尾遺跡 竪穴住居跡３（１/50）…… 15
図 13　長井丸尾遺跡 竪穴住居跡３出土遺物（1/3）…… 15
図 14　長井丸尾遺跡 掘立柱建物跡１（１/50）…… 16
図 15　長井丸尾遺跡 掘立柱建物跡２（１/50）…… 17
図 16　長井丸尾遺跡 掘立柱建物跡３（1/50）…… 18
図 17　長井丸尾遺跡 竪穴（１/50）…… 19
図 18　長井丸尾遺跡 土坑（１/50）…… 20
図 19　長井丸尾遺跡出土遺物（1/3，2/3）…… 21

表 目 次

表１　基盤整備促進事業（長井第二地区）試掘坑一覧表…… 2
表２　長井尾ノ花遺跡出土遺物観察表…… 9
表３　長井丸尾遺跡出土遺物観察表…… 20

写真図版目次

カラー図版１　長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡航空写真（真上から）
カラー図版２　１．長井丸尾遺跡航空写真（真上から）
２．長井丸尾遺跡出土縄文土器（外面）
３．長井丸尾遺跡出土縄文土器（内面）
図　版　１　１．長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡遠景（覗山から）
２．長井尾ノ花遺跡調査前状況（南東から）
３．長井丸尾遺跡調査前状況（南東から）
４．長井尾ノ花遺跡航空写真（真上から）
図　版　２　１．長井尾ノ花遺跡 竪穴住居跡（南から）
２．長井尾ノ花遺跡 竪穴住居跡遺物出土状況（北から）
３．長井尾ノ花遺跡 土坑（北から）
４．長井尾ノ花遺跡 土坑遺物出土状況（北から）
図　版　３　１．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１（南から）
２．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１Ｌ字状かまど（南から）
３．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１かまど（南から）
４．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１土層（南から）
図　版　４　１．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１かまど土層西側（南から）
２．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１かまど土層東側（南から）
３．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１Ｌ字状かまど土層（東から）
４．長井丸尾遺跡 竪穴（東から）
図　版　５　１．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２（南から）
２．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２土層（南から）
３．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ｂ炉（東から）
４．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ｂ石組１（西から）
５．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ｂ石組２（西から）
図　版　６　１．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ａ遺物出土状況１（遺物番号 1，北から）
２．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ａ遺物出土状況２（遺物番号 2，南から）
３．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ｂ遺物出土状況１（遺物番号 7，北から）
４．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ｂ遺物出土状況２（遺物番号 9，東から）
５．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡３（東から）
６．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡３かまど（南から）
図　版　７　１．長井丸尾遺跡 掘立柱建物跡１（東から）
２．長井丸尾遺跡 掘立柱建物跡２（北から）
３．長井丸尾遺跡 掘立柱建物跡３（東から）
４．長井丸尾遺跡 土坑土層（南から）
図　版　８　長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡出土遺物

Ⅰ　はじめに

１．調査に至る経緯

平成16年度に、基盤整備促進事業（長井第二地区）の工事が行われることになり、前年度の平成15年12月2・3・8日に試掘調査を実施した結果、長井尾ノ花遺跡及び長井丸尾遺跡が確認された（図１・表１）。２遺跡は、工事による削平が予定されたため、事業主体である行橋市農政課と協議を行い、合わせて約1,000㎡について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

２．調査の経過

平成16年9月16・17日・10月1日に発掘調査前風景を写真撮影。4日にはバックホーによる表土剥ぎに着手した。10月14日に発掘機材を搬入し、発掘作業に入る。測量作業は11月10日に開始し、磁北に合わせて任意の10mグリッドを設定し、100分の１の平板図（遺構配置図）及び20分の１の遺構平面図を作成した。遺構や遺物出土状況の写真撮影は、35㎜フィルム（モノクロ・リヴァーサル・カラーネガ）で行った。11月18日に重機を引き上げた。12月2日に航空写真撮影を実施。12月7日に作業を終了し、10日には現場を撤収した。

遺物及び図面の整理作業は、平成16年度に水洗・接合・註記、17年度に復原、21年度に実測、22年度に実測・図面整理・トレース・遺物写真撮影及び原稿作成を行い、報告書を刊行することとなった。

３．調査体制

発掘調査及び報告書作成に係る組織は、下記のとおりである。

発掘調査（平成16年度）

行橋市教育委員会

教育長　徳永 文晤
教育部長　光畑 浩治
文化課長　奥　広俊
庶務
文化課長補佐兼文化振興係長　安中 知治
文化課　文化振興係　上原 圭三
調査
文化課　文化財保護係長　小川 秀樹
文化課　文化財保護係　伊藤 昌広（発掘担当）
文化課　文化財保護係　中原　博（試掘担当）

報告書作成（平成22年度）

行橋市教育委員会

教育長　徳永 文晤（～ 10月9日）
教育長　山田 英俊（10月10日～）
教育部長　三角 正純
文化課長　酒井 和宣
庶務
文化課　文化振興係長　辛嶋 智恵子
文化課　文化振興係　北田 千砂子
調査
文化課長補佐兼文化財保護係長　小川 秀樹
文化課　文化財保護係　伊藤 昌広（整理担当）
文化課　文化財保護係　中原　博
文化課　文化財保護係　山口 裕平

発掘作業従事者（順不同）

今村 美香　北本 悦子　工藤 祥子　佐藤 愛子　島木 邦子　田中 すま子　谷口 貞子
中島 裕子　古木 初子　新保 初枝　宮崎 和子　宮崎 弘子　清原 敏伸　清原 芳江
西 まゆみ　上岡 栄子　角田 ヒサヱ　金子 孝義　小渕 八寿子　浦田 秋子　赤波江 静代
小野田 トミヱ　志水 ゆき子　角田 義彦　池田 保　末永 修崇　猪之鼻 範夫

整理作業従事者（順不同）

奥野 康代　河野 竜二　橋田 孝子　佐々木 豊子　松本 まゆみ　鎌田 尚子

なお、発掘調査及び報告書作成にあたり、次の方々および諸機関からご指導・ご教示・ご協力をいただきました。御芳名を記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）

丸山 義照　宮崎 誠　永野 晴道　森 勝子　宮崎 正行　宮崎 寿　行橋市農政課　小池 史哲
杉原 敏之　宮地 聡一郎　岩永 雅彦

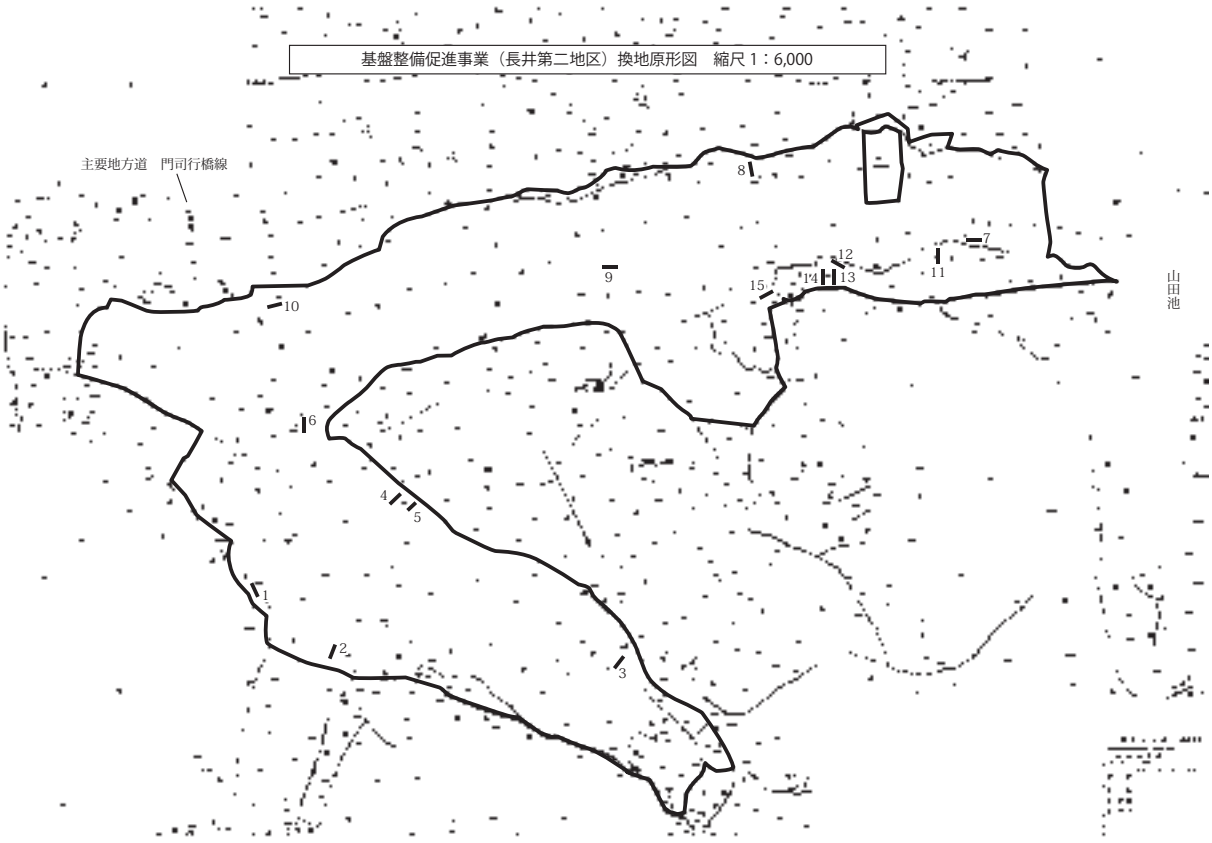


図１　基盤整備促進事業（長井第二地区）区域及び試掘坑配置図（1/6,000）

トレンチ番号	面積（㎡）	検出遺構	出土遺物	備　　考
1	3.5			
2	7.0			
3	10.5			
4	10.5	溝		長井尾ノ花遺跡
5	7.0			長井尾ノ花遺跡
6	2.1			
7	3.5			
8	3.5			
9	2.1			
10	7.0			
11	7.0			
12	7.0			長井丸尾遺跡
13	7.0			長井丸尾遺跡
14	7.0	溝		長井丸尾遺跡
15	7.0			
合　　計	91.7			

表１　基盤整備促進事業（長井第二地区）　試掘トレンチ一覧表

Ⅱ　位置と環境

１．地形と地質

長井尾ノ花遺跡（１）及び長井丸尾遺跡（２）は、行橋市の東部、覗山（標高121.7m）北東麓の縁辺部にある中位段丘上[文献１～３]に立地する（図２）。海岸線までは約500mの距離にある。
中位段丘は、新田原礫層堆積面及び阿蘇－４火砕流堆積物堆積面[文献４]（約8.4 ～ 8.9万年前に阿蘇カルデラより噴出[文献５・６]の二つに分けられているが、本遺跡が属するのは、後者の阿蘇－４火砕流堆積物がのる中位段丘面である（図中に●で示す）。

２．周辺の遺跡

今回報告する２遺跡の周辺には、図３に示すように、多数の遺跡が存在する。以下、時代ごとに概略を記述する。

旧石器時代の遺跡は少数しか確認されていないが、渡築紫遺跡Ｃ区（５）において、福岡県内でも最古級である後期旧石器時代初頭頃（約3万年前）の石器群（台形様石器・尖頭状石器等）が層位的に出土した[文献７・註１]。また、原位置を離れた状態であるが、稲童豊後塚遺跡（８）[文献８・註２]では今峠型ナイフ形石器・原ノ辻型台形石器・剥片尖頭器の基部が、稲童上迫遺跡（11）[註３]では角錐状石器・ナイフ形石器・細石刃石核が出土している。

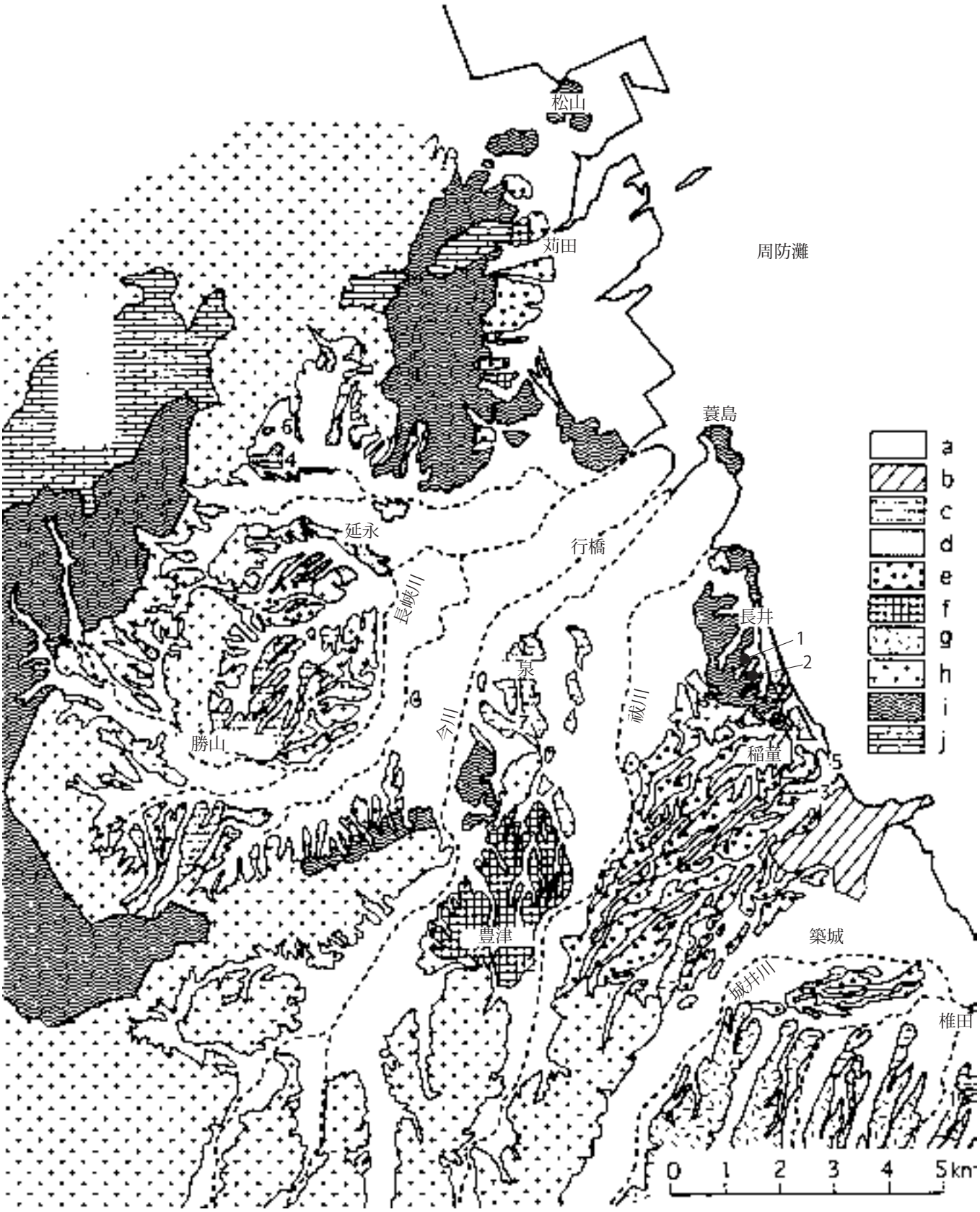
縄文時代についても、遺跡数はまだ少なく、長井作り山遺跡（４）[註４]で早期のトロトロ石器が、稲童豊後塚遺跡（８）[註２]で早期の押型文土器が、稲童野稲迫遺跡（９）[註５]で前期の轟Ｂ式土器が出土している程度である。

後期については、集落跡が確認されている。長者原遺跡[文献９]からは末頃の竪穴住居跡１軒が、みやこ町節丸西遺跡[文献10]から中頃～晩期初頭の竪穴住居跡24軒が、みやこ町上伊良原川端遺跡[文献11]から前半の竪穴住居跡２軒が、また、築上町山崎遺跡・石町遺跡[文献12]からは前半～後半の竪穴住居跡11軒が検出された。

弥生時代になると、遺跡数が大幅に増加する。長井遺跡（３）[文献13・14]は、昭和30年代に砂利採取のため500基以上の箱式石棺が消滅したが、夜臼式土器や板付Ⅰ～Ⅲ式土器などが採集されている。長井作り山遺跡（4）[註４]からは長井尾ノ花遺跡（１）の竪穴住居跡とほぼ同時期の弥生時代終末～古墳時代初頭頃の方形周溝墓が1基検出された。大規模な集落遺跡としては下稗田遺跡[文献15]・前田山遺跡[文献16]などが発掘調査されている。

古墳時代も、引き続き、集落とともに古墳（群）が多く営まれる。集落では、長井丸尾遺跡（２）と同時期（６～７世紀）としては、渡築紫遺跡Ｂ・Ｃ区（７・５）[文献17・註１]・稲童豊後塚遺跡（８）[註２]・稲童野稲迫遺跡（９）[註５]・稲童大山遺跡（10）[註６]・代遺跡（13）[註７]などが発掘調査されている。また、古墳（群）としては、稲童古墳群（12）[文献18]や渡築紫古墳群（６）[文献17]・稲童豊後塚古墳群（８）[註８]・穴田古墳群（14）[文献19]・小迫谷６号墳（15）[文献19]・馬場代２号墳（16）[註９]などが調査されている。

7世紀後半になると御所ヶ谷神籠石[文献20・21]が築かれ、7世紀末～ 8世紀初頭には椿市廃寺[文献22・23]が創建される。



a：沖積層　b：人工改変地　c：泉砂礫層　d：阿蘇－４火砕流堆積物　e：新田原礫層　f：豊津礫層　g：耶馬渓層　h：花崗岩類　i：変成岩類　j：石灰石
1：長井尾ノ花遺跡　2：長井丸尾遺跡

図２　京都平野の地質図（文献３より，1/100,000）

図３　周辺遺跡分布図（1/25,000）

参考引用文献

（1）千田 昇 1984.10「豊前行橋平野の地形発達―周防灘沿岸平野の地形学的研究（1）―」『大分大学教育学部研究紀要』第6巻7号（自然科学）7～15頁
（2）千田 昇 1997.4「歴史の背景としての自然」『豊津町史』上巻3～30頁　豊津町・豊津町史編纂委員会
（3）石井 邦宙・下山 正一・松田 時彦 1994.12「行橋平野の最終間氷期と完新世の旧汀線高度」『九州大学理学部研究報告』（地球惑星科学）第18巻 第2号 157～174頁
（4）小野 晃司・松本 征夫・宮久 三千年・寺岡 易司・神戸 信和 1977.3『竹田地域の地質 地域地質研究報告 5万分の1図幅』工業技術院 地質調査所
（5）町田 洋・新井 房夫・百瀬 貢 1985.7「阿蘇4火山灰―分布の広域性と後期更新世示標層としての意義―」『火山』第2集第30巻第2号 49～70頁
（6）Machida,H.(1999.6)Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan：recent progress.Quat.Res38(3),p.194-201
（7）吉留 秀敏 2004.10「京都平野のあけぼの―旧石器時代―」『行橋市史』上巻 143～182頁 行橋市・行橋市史編纂委員会
（8）行橋市教育委員会 2007.3『稲童豊後塚遺跡1』行橋市文化財調査報告書第34集
（9）福岡県教育委員会 2000.3『寄原遺跡・長者原遺跡』福岡県文化財調査報告書第146集
（10）福岡県教育委員会 1992.3『山崎遺跡（Ⅰ）付 石町遺跡』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告7上巻
（11）豊津町教育委員会 1990.3『豊前国府および節丸西遺跡』豊津町文化財調査報告書第9集
（12）みやこ町教育委員会 2007.3『みやこ町内遺跡群Ⅰ』みやこ町文化財調査報告書第2集
（13）定村 貴二・小田 富士雄 1965.10「福岡県長井遺跡の弥生式土器」『九州考古学』25･26号
（14）小田 富士雄 2006.3「長井遺跡」『行橋市史』資料編 原始・古代 行橋市・行橋市史編纂委員会
（15）行橋市教育委員会 1985.3『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集
（16）行橋市教育委員会『前田山遺跡』1987.3 行橋市文化財調査報告書第19集
（17）行橋市教育委員会『渡築紫遺跡』1994.3 行橋市文化財調査報告書第23集
（18）行橋市教育委員会『稲童古墳群』2005.3 行橋市文化財調査報告書第32集
（19）福岡県教育委員会『穴田古墳群・覗山城跡』1998.3
（20）行橋市教育委員会 1998.3『御所ヶ谷神籠石』行橋市文化財調査報告書第26集
（21）行橋市教育委員会 2006.3『御所ヶ谷神籠石Ⅰ』行橋市文化財調査報告書第33集
（22）行橋市教育委員会 1980.3『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書第8集
（23）行橋市教育委員会 1996.3『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第24集

註

（1）1999～2000年度に行橋市教育委員会が調査。
（2）2003～2005・2007年度に行橋市教育委員会が調査。
（3）2008年度に行橋市教育委員会が調査。
（4）2000年度に行橋市教育委員会が調査。
（5）2005年度に行橋市教育委員会が調査。
（6）2006年度に行橋市教育委員会が調査。
（7）2002年度に行橋市教育委員会が調査。
（8）2005・2007年度に行橋市教育委員会が調査。
（9）1996年度に行橋市教育委員会が調査。

Ⅲ　調査の記録

長井尾ノ花遺跡及び長井丸尾遺跡は、覗山から北東側に延びる丘陵の縁辺部にある中位段丘上に立地する。遺構検出面（地山）は、黄褐色あるいは赤褐色を呈する風化火山灰層である。

以下、遺跡ごとに記述する。

１．長井尾ノ花遺跡の調査

長井尾ノ花遺跡は、福岡県行橋市大字長井字尾ノ花899番地に所在する遺跡である。発掘調査面積は315㎡、遺構検出面の標高は5.6～5.4mであり、竪穴住居跡１軒・土坑１基等の遺構を確認し（図４）、弥生土器・土師器等の遺物が出土した。

（１）竪穴住居跡（図５，図版２－１）

竪穴住居跡は１軒検出した。

Ｂ・Ｃ－２グリッドに位置する。削平が非常に著しく、不整形を呈している。ベッド状遺構及び

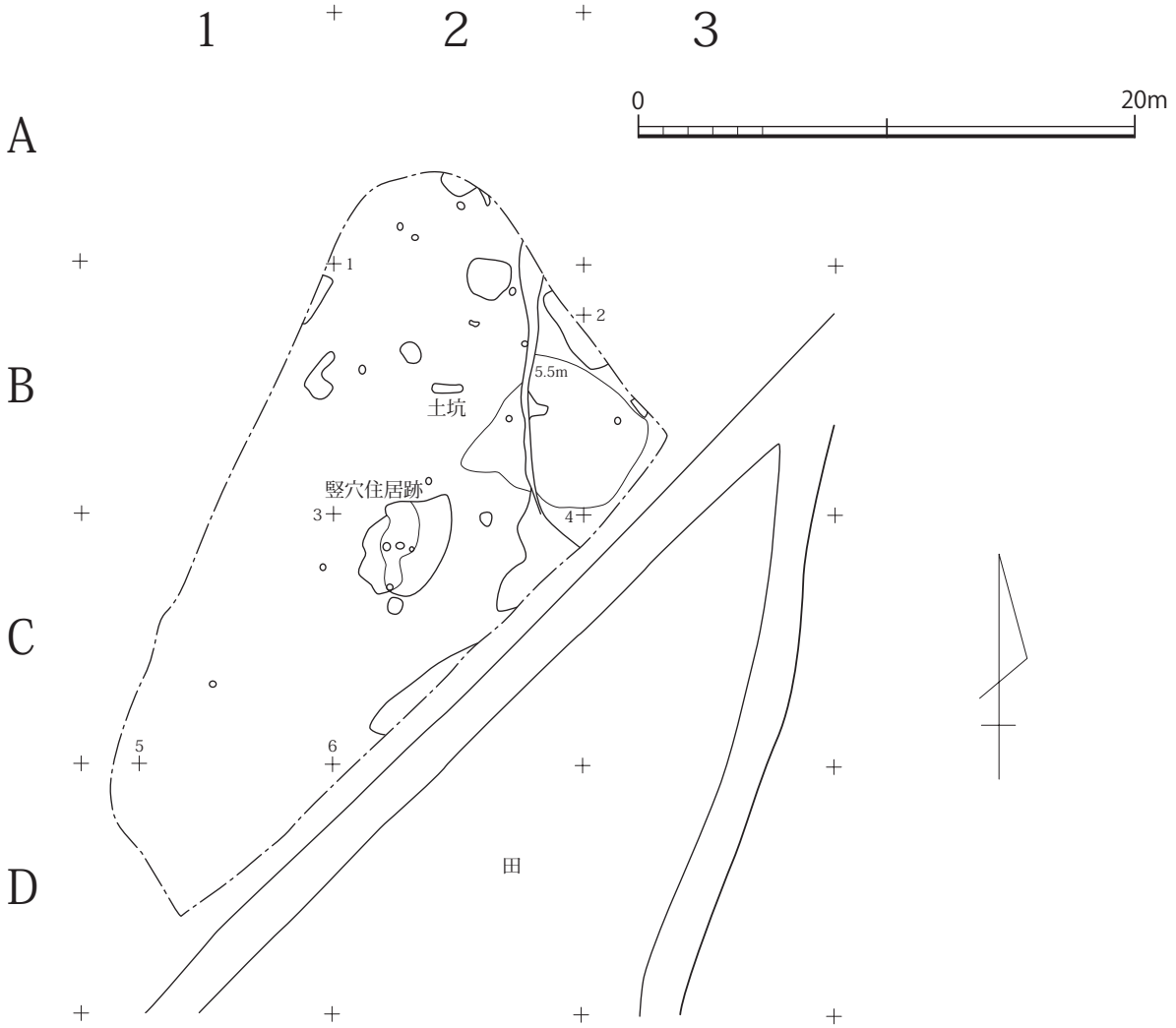


図４　長井尾ノ花遺跡遺構配置図（1/300）

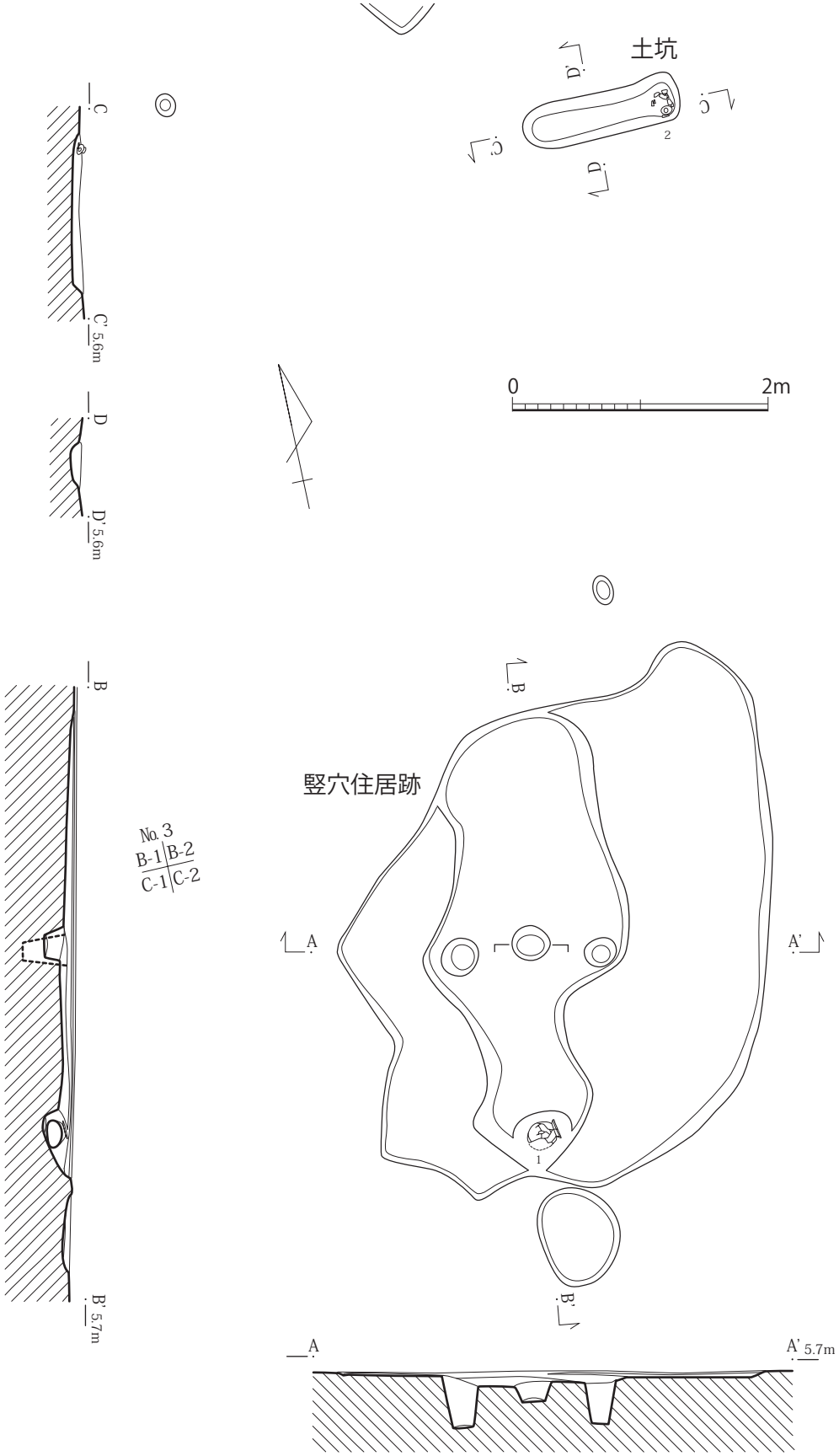


図５　長井尾ノ花遺跡 竪穴住居跡・土坑（1/50）

屋内土坑を持ち、4.3m×3.35m、深さはベッド部で0.6 ～ 2.8㎝、本体部で4.2 ～ 10.2㎝を測る。主柱穴は2本で、芯々間の距離は1.07m、中間にピットが1基ある。

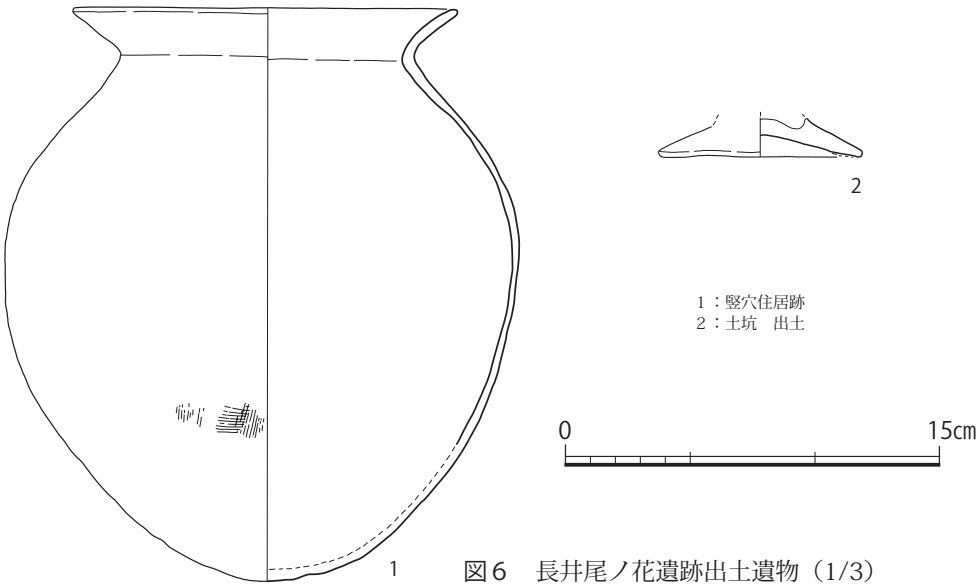


図６　長井尾ノ花遺跡出土遺物（1/3）

出土遺物（図６－１，図版２－２，８）

古式土師器（１）

１は甕である。完形に復原でき、口径 15.4㎝・胴部最大径 20.55㎝・高さ 23.0㎝を測る。器厚が２～５㎜と非常に薄い。胴部の下半部に煤が付着する。屋内土坑から出土した。

その他に、弥生土器・擂鉢・磁器の小片が出土している。

（２）土坑（図５，図版２－３）

土坑は１基検出した。

Ｂ－２グリッドに位置する。長方形を呈し、長さ 1.25m ×幅 0.48m、深さ４～７㎝を測る。

出土遺物（図６－２，図版２－４，８）

弥生土器（２）

２は高坏の脚部である。脚部径 8.2㎝・残存高 1.55㎝を測る。土坑の東端から出土した。

（３）その他

調査区の東端に、南北方向に延びる溝を検出した。水路跡であろうか。出土遺物には、弥生土器・磁器の小片等がある。

また、調査区内からは、黒耀石製の剥片や、土師質の管状土錘・瓦質土器の小片等も出土している。

番　号	出土地	種　別	器　種	法量（cm）	調　整	焼　成	胎　土	色　調	残　存	備　考
図 6-1	竪穴住居跡	古式土師器	甕	口径：15.4 胴部最大径：20.55 器高：23.0	内　ナデ 外　ナデ→ハケメ	やや不良	１～３㎜の砂粒を含む	内外　浅黄橙 10YR 8/4	胴部 1/4 欠	屋内土坑出土 煤付着
図 6-2	土坑	弥生土器	高坏	脚部径：8.2 残存高：1.55	内外　ナデ	良好	微細～２㎜の砂粒を含む	内外　橙 7.5YR 6/6	脚部	

表２　長井尾ノ花遺跡出土遺物観察表

２．長井丸尾遺跡の調査

長井丸尾遺跡は、福岡県行橋市大字長井字丸尾 752・767・768 番地に所在する遺跡である。試掘調査時には重機が入れない部分があったため、遺構の広がる範囲を確認しながら、表土剥ぎを行った。発掘調査面積は 670㎡、遺構検出面の標高は 8.4 ～ 6.8m であり、竪穴住居跡４軒・掘立柱建物跡３棟・竪穴１基・土坑１基等を確認し（図７）、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石鏃・楔形石器・スクレイパー・石核・石剣片・打製石斧・磨製石斧・磨石等が出土した。

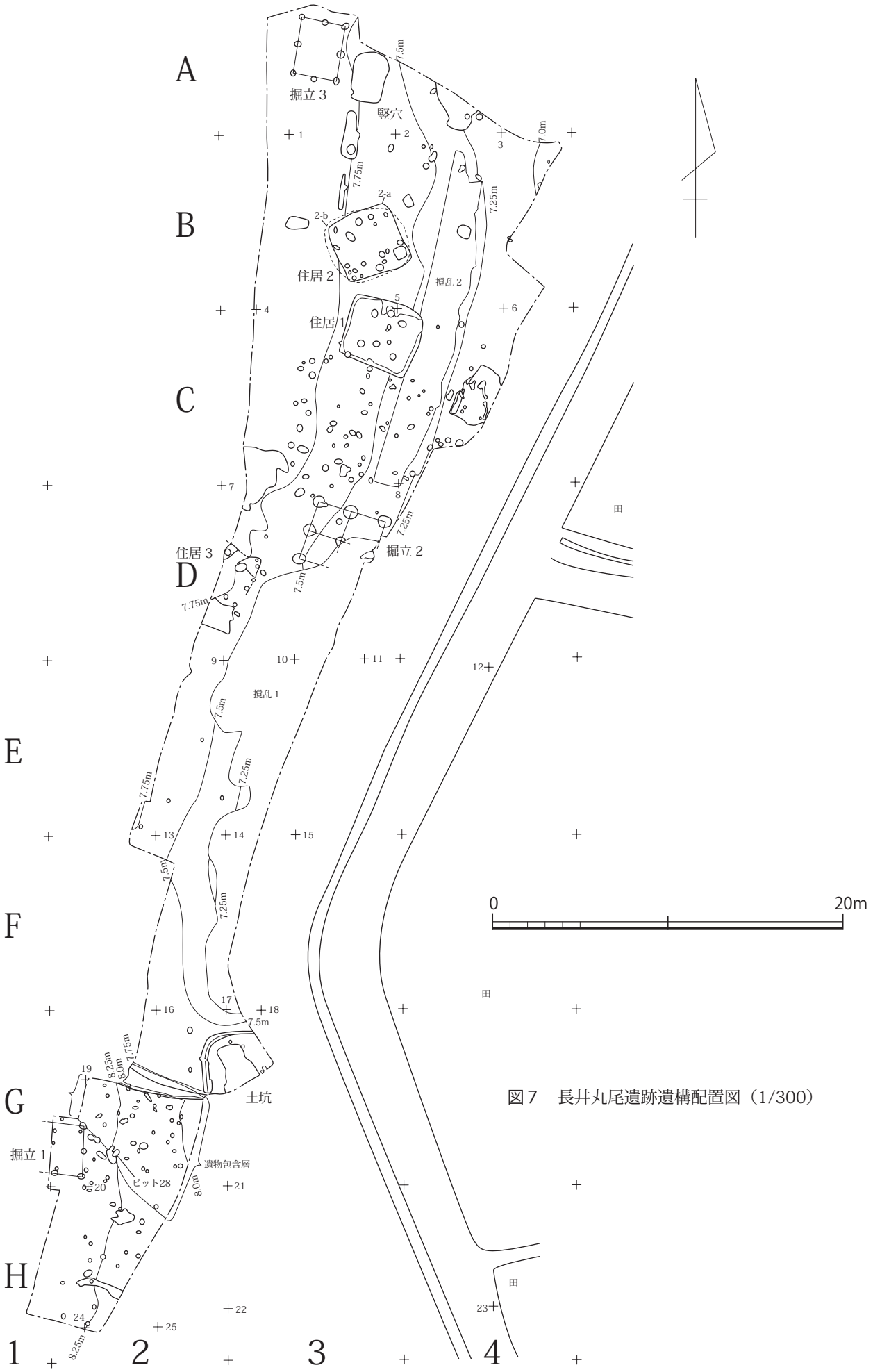


図７　長井丸尾遺跡遺構配置図（1/300）

（１）竪穴住居跡

竪穴住居跡は４軒検出した。

竪穴住居跡１（図８，図版３・４－１～３）

Ｂ・Ｃ－２・３グリッドに位置する。3.82 × 4.31m の、横長方形を呈し、深さ 15 ～ 31㎝。北側中央部にかまどを有し、石製の支柱を立てていた。かまどを覆っていたのと同じ白色粘土が、かまどに向かって右側へ壁伝いに伸びていたため、オンドル住居と考えられる。他の壁際には幅 15 ～ 20㎝・深さ５～７㎝程度の周溝が巡る。柱穴は４本、主軸方位をＮ－ 19°－Ｅにとる。東端は攪乱１により削平を受ける。竪穴住居跡２のすぐ南側に隣接する。なお、住居跡１及び２の土層番号１～４は共通である。

出土遺物（図９－１・２，図版８）

土師器（１・２）

１は甑の胴部とみられる。残存高 10.8㎝、かまど内から出土した。２は甕の口縁部で、復原口径 17.8㎝・残存高 6.55㎝を測る。住居北側から出土した。

その他に、須恵器の坏の小片が出土している。

竪穴住居跡２（図 10，図版５）

Ｂ－２・３グリッドに位置する。竪穴住居跡１のすぐ北側に隣接する。当初、古墳時代の終わり頃の時期のものとみて発掘していると、床面から土器を敷いて石を組んだ炉跡が見つかり、縄文時代後期の竪穴住居跡と重複していることが判明したため、初めに検出した古墳時代のものを２－ａ、後から気付いた縄文時代のほうを２－ｂとして述べることにする。縄文時代の遺構（炉等）が残されているため、ａ・ｂとも、床面はほぼ同じ高さであったと考えられる。

竪穴住居跡２－ａ

3.67 × 3.76m の、方形を呈し、深さ７～ 15㎝程度。北側に焼土が残っていたため、北側中央部にかまどを有していたと考えられる。柱穴は４本、主軸方位をＮ―24.5°―Ｗにとる。

出土遺物（図 11 －１・２，図版６－１・２）

須恵器（１・２）

１は坏蓋で、口径 12.6㎝・底径 5.2㎝・高さ 3.4㎝を測る。磨滅が著しい。床面出土。２は埦の身で、復原底径 8.7㎝・残存高 1.35㎝を測る。

竪穴住居跡２－ｂ

壁体は確認できなかった。住居の平面形態については、一般的には炉が中央部にあると考えられるが、柱穴とみられるピット８本の配置状況から、4.0 × 4.6m 程度の隅丸長方形あるいは楕円形に復原した（点線で表示）。石囲い土器炉１基・石組２基を有すると考えている。柱穴の深さは７～ 20㎝である。石囲い土器炉は、40 × 30㎝・深さ５㎝程度の掘り込みの縁に、いくつかの石を立て並べてあったもののうち、３個だけ（大きさは拳大）が残されたようである。また、底面には３個体の土器が敷いてあった。破砕した土器を組み合わせて再利用したのであろうか。いずれも内

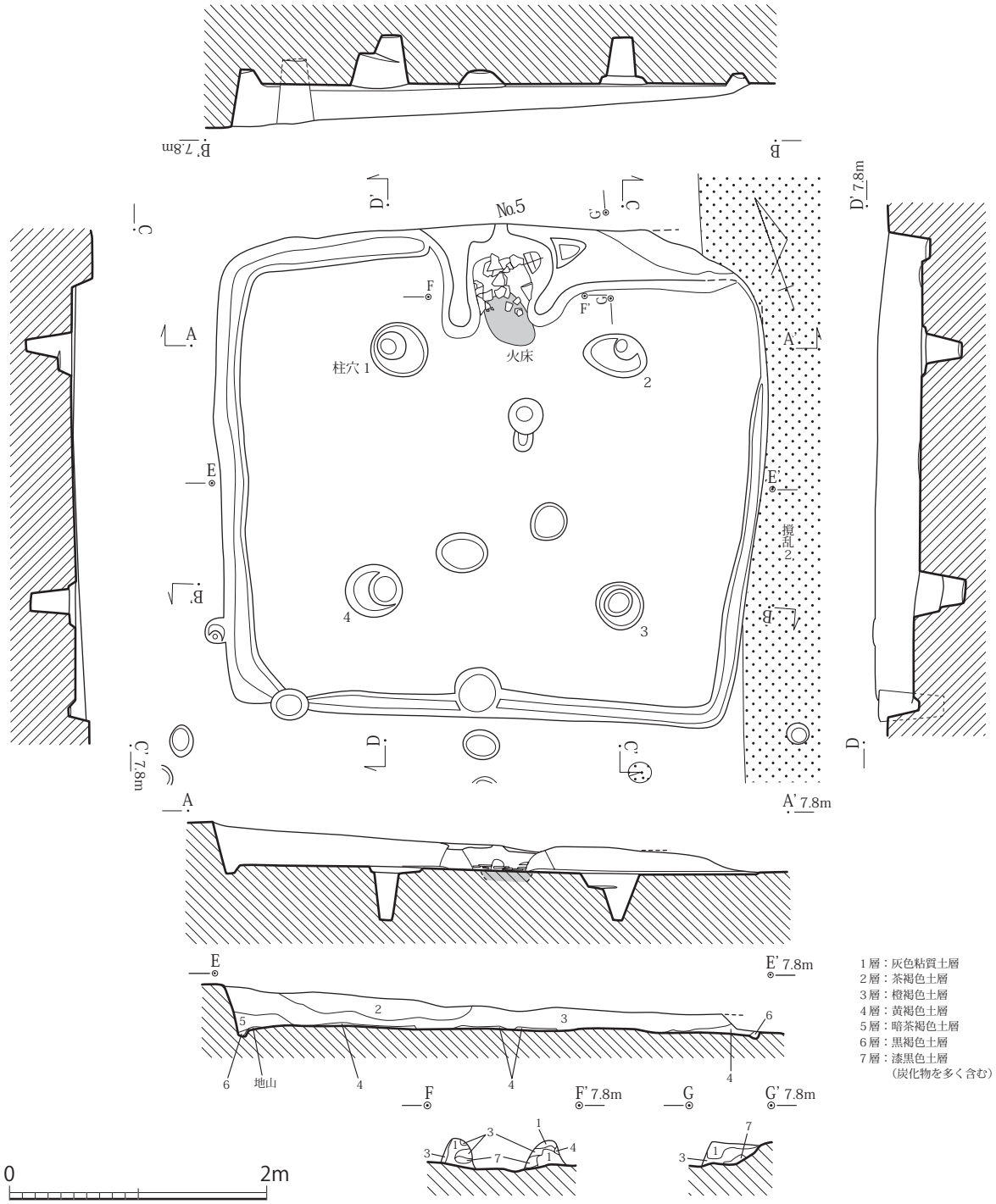


図８　長井丸尾遺跡　竪穴住居跡１（1/50）

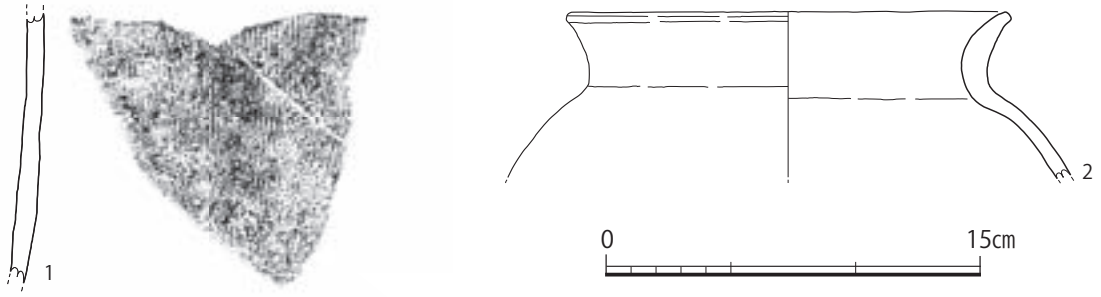


図９　長井丸尾遺跡　竪穴住居跡１出土遺物（1/3）

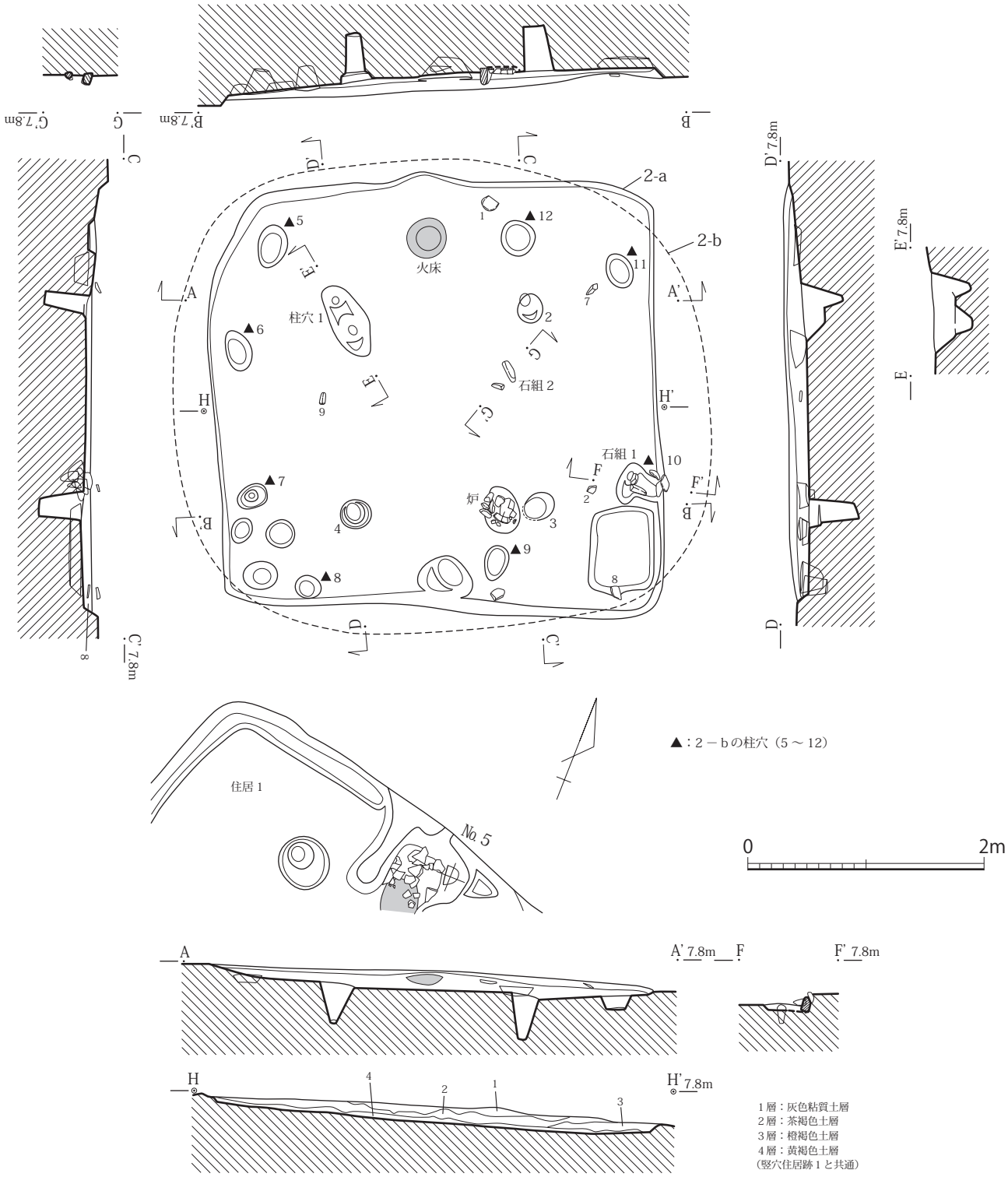


図 10　長井丸尾遺跡　竪穴住居跡２（1/50）

面を内側に向けて据えられていた。石組１は拳大～幼児の人頭大の５個、石組２は拳大～幼児の人頭大の２個で構成される。なお、炉及び石組を構成する石は、すべて熱を受けているとみられる。

出土遺物（図 11 －３～９，図版６－３・４）

縄文土器（３～５）

３～５は、粗製の深鉢形土器で、石囲い土器炉の底面として使用されていた。３は口縁部で、条痕調整後磨かれており、残存高 8.85㎝を測る。４は頸部～胴部で、両面に二枚貝による条痕調整

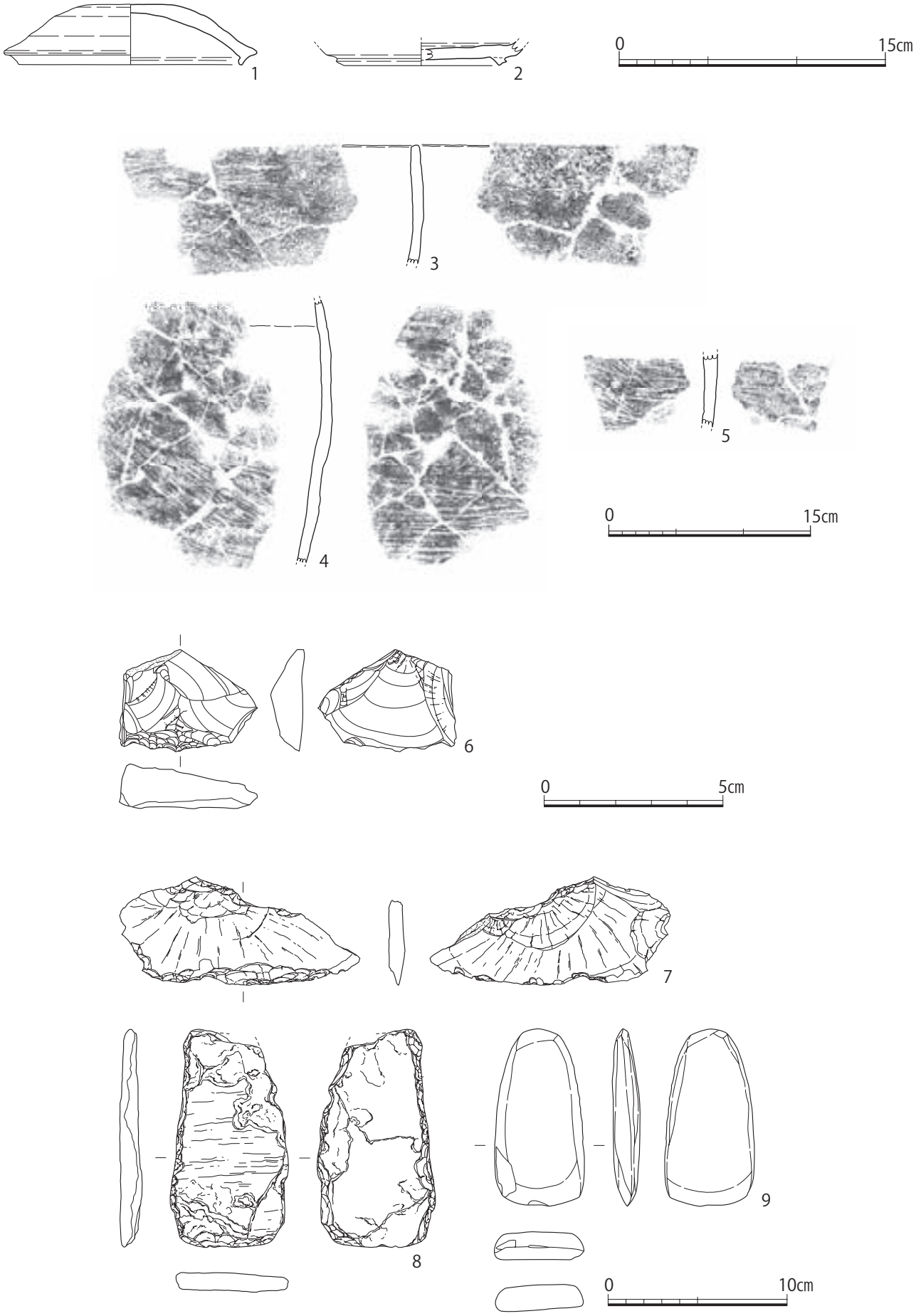


図 11　長井丸尾遺跡　竪穴住居跡 2 出土遺物（1・2・7 ～ 9 は 1/3，3 ～ 5 は 1/4，6 は 2/3）

が施され、残存高 19.4㎝を測る。５は胴部で、両面に条痕調整が施され、残存高 5.4㎝を測る。

石器（６～９）

７はスクレイパーで、長さ 6.05㎝・幅 13.4㎝・厚さ 0.9㎝・重量 81.44g、安山岩製。８は打製石斧で、長さ 12.2㎝・幅 6.6㎝・厚さ 1.25㎝・重量 131.63g、緑色片岩製。９は磨製石斧で、長さ 9.9㎝・幅 5.0㎝・厚さ 1.55㎝・重量 119.43g。風化が著しい。床面出土。ホルンフェルス製。６はスクレイパーで、長さ 2.9㎝・幅 3.85㎝・厚さ 0.95㎝・重量 10.78g、姫島産黒耀石製。柱穴 12 から出土。

また、柱穴３からは縄文土器の小片が、柱穴 12 からは６の他に縄文土器及び土師器の小片が出土している。

その他に、姫島産黒耀石製及びガラス質安山岩製の剥片が出土している。

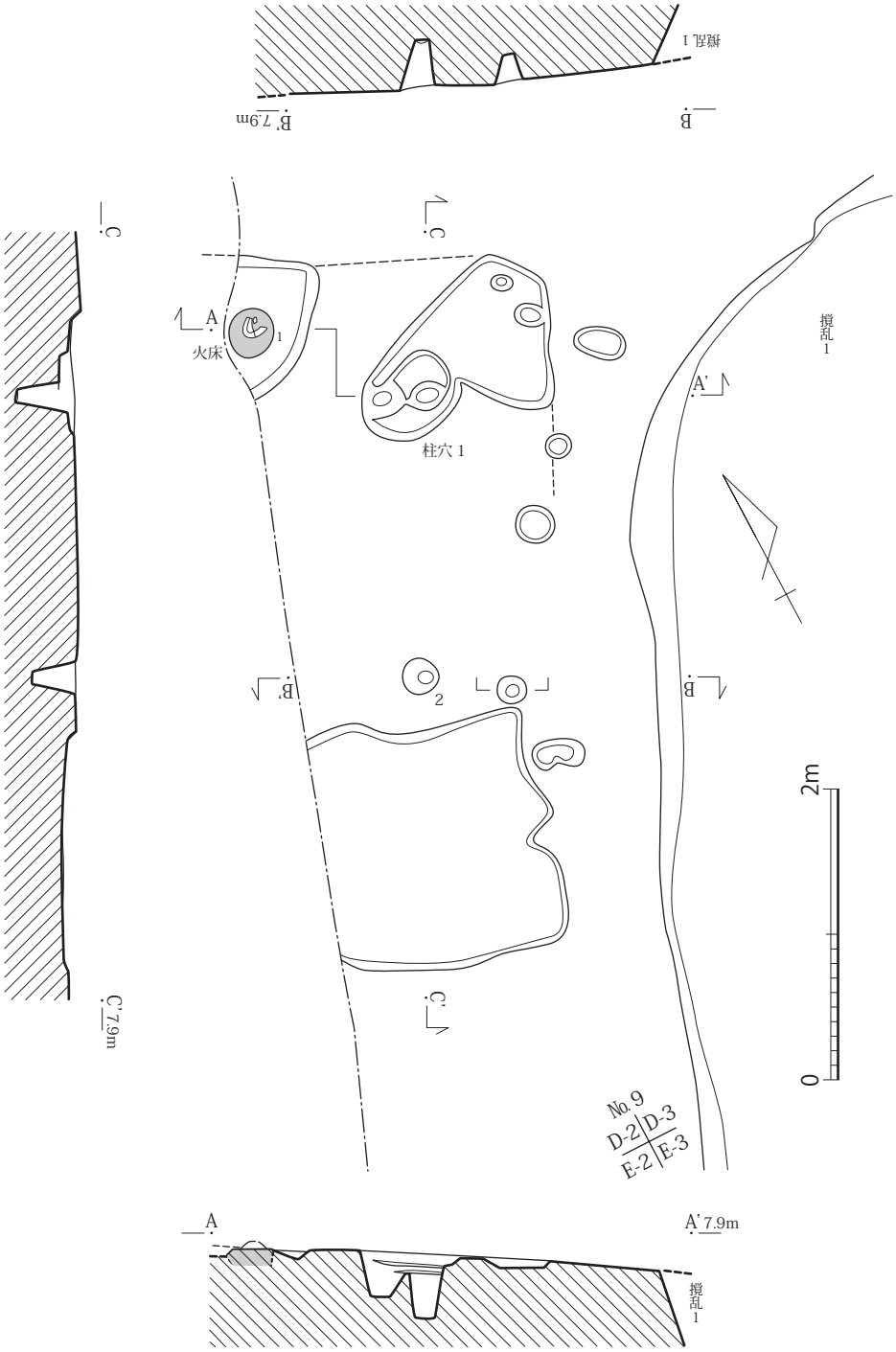


図 12　長井丸尾遺跡　竪穴住居跡３（1/50）

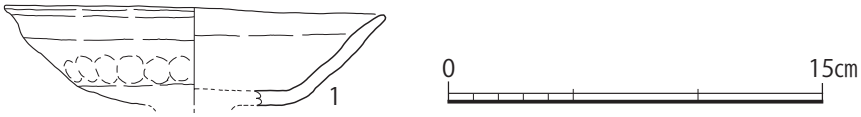


図 13　長井丸尾遺跡　竪穴住居跡３出土遺物（1/3）

竪穴住居跡３（図 12，図版６－３・４）

Ｄ－１・２グリッドに位置する。壁体は残っていなかったが、かまどの支柱と火床が残っていたため、竪穴住居跡と判断した。主柱穴は東側の２本を検出し、距離は芯々間で 1.94m を測る。

出土遺物（図 13 － 1，図版６－５，８）

土師器（１）

１は高坏の坏部で、口

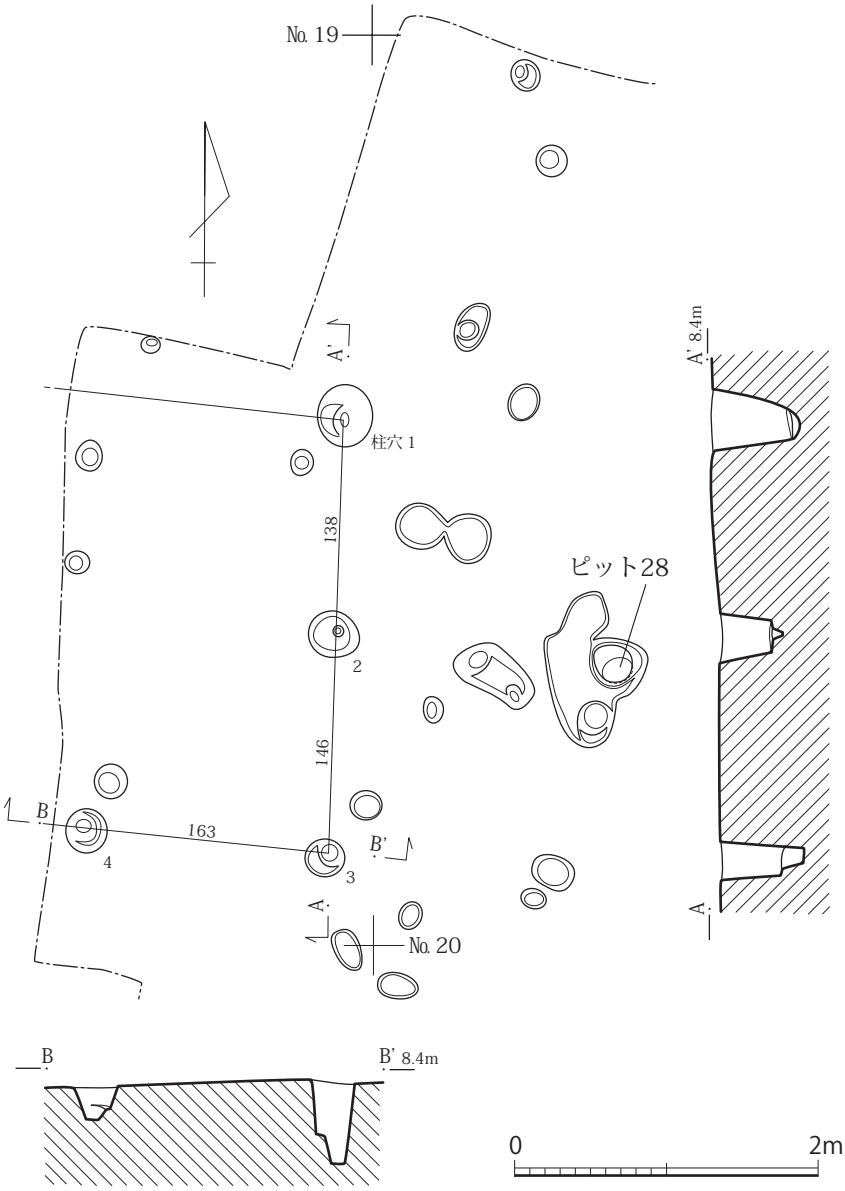


図14　長井丸尾遺跡　掘立柱建物跡1（1/50）

径15.3㎝・残存高3.9㎝を測る。かまどの支柱として、倒立の状態で据えられていた。

その他に、須恵器の小片が出土している。

（2）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟検出した。

掘立柱建物跡1（図14，図版7－1）

A－2グリッドに位置する。弥生土器及び土師器小片を多く含む遺物包含層の下から検出した。主軸が磁北に近いことや、主軸に対しての南側の梁行の角度が、掘立柱建物跡3に似ていることから、2間×2間の側柱建物と推定した。梁行163㎝以上・桁行284㎝以上で、主軸方位をN―2°―Eにとる。

柱穴1及び2から土師器の小片が出土している。

掘立柱建物跡2（図15，図版7－2）

D－2グリッドに位置する。梁行2間×桁行2間の総柱建物とみられる。梁行362㎝・桁行390㎝で、主軸方位をN―21°―Eにとる。南東側が攪乱1によって削平を受ける。

柱穴1・2・4～6から土師器の小片が、柱穴7からは須恵器の小片が出土している。

掘立柱建物跡3（図16，図版7－3）

G－1グリッドに位置する。梁行2間×桁行2間の側柱建物である。梁行248㎝・桁行324㎝（平均値）で、主軸方位をN―9°―Eにとる。竪穴のすぐ西側に隣接する。

柱穴5から、弥生土器の鋤先口縁の小片が出土している。

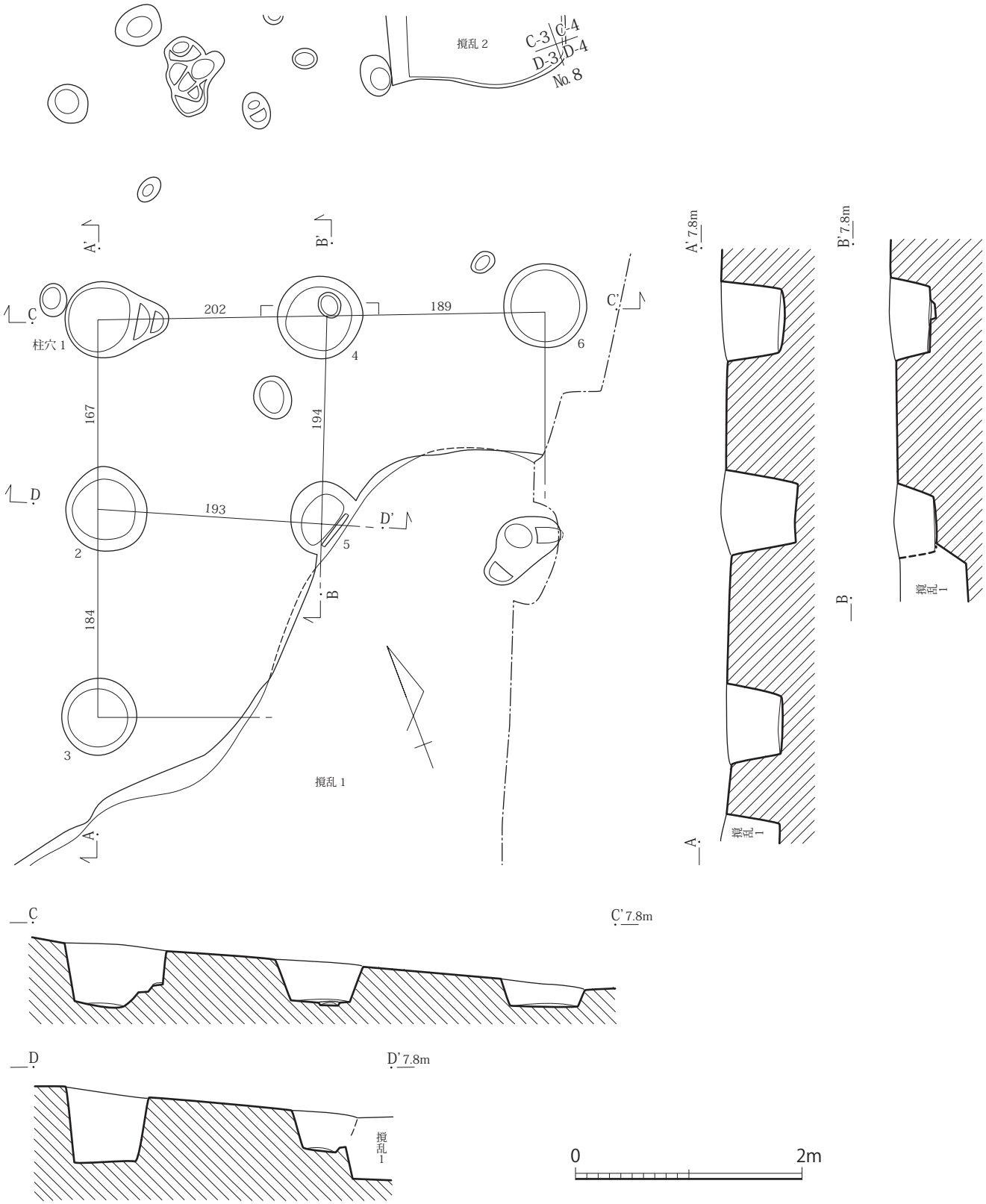


図 15　長井丸尾遺跡　掘立柱建物跡 2（1/50）

（3）竪穴（図 17，図版 4 － 4）

竪穴は 1 基検出した。

A － 2 グリッドに位置する。隅丸長方形を呈し、2.99m × 2.01m、深さ 5 ～ 14㎝を測る。掘立柱建物跡 3 のすぐ東側に隣接する。

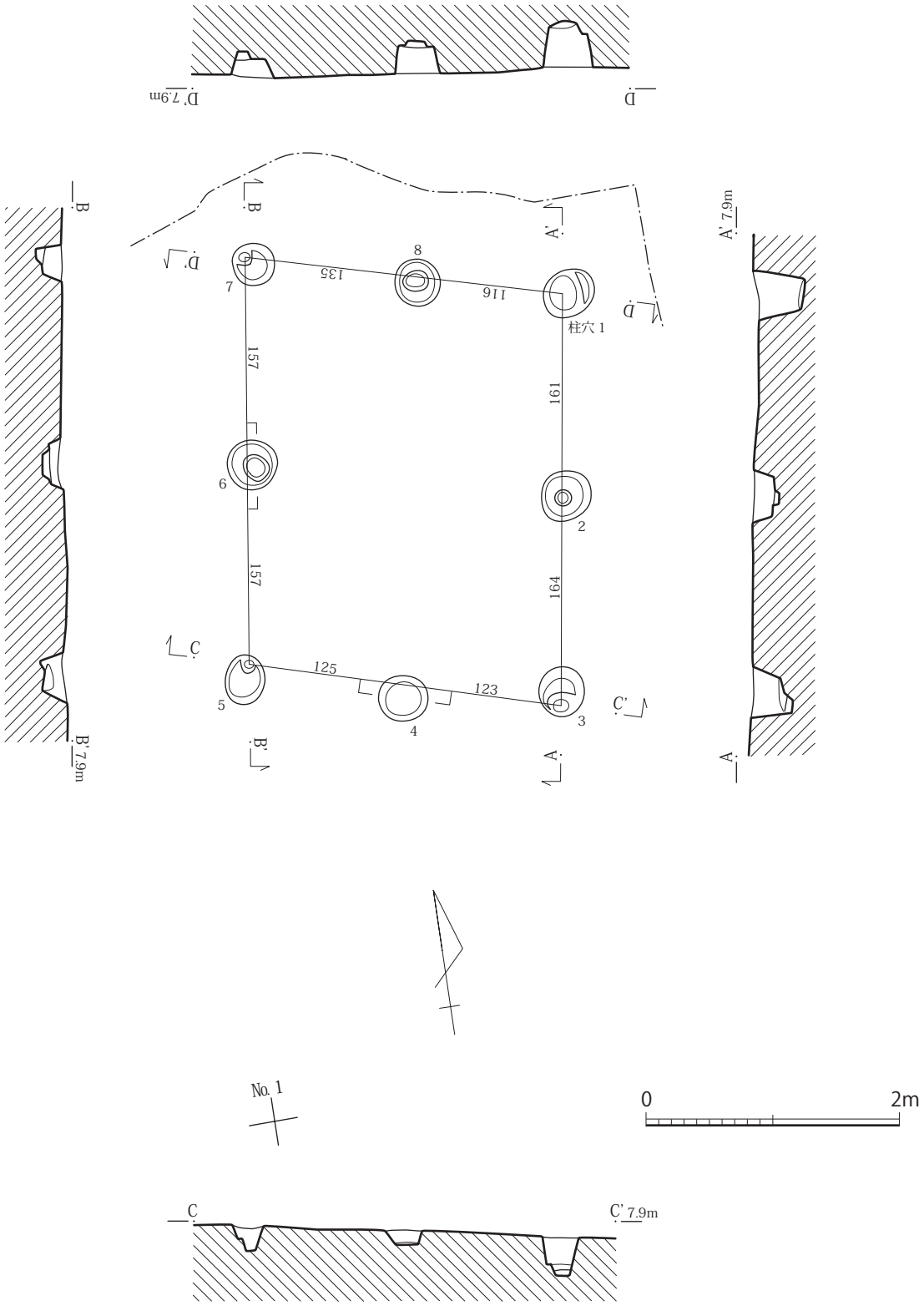


図 16　長井丸尾遺跡　掘立柱建物跡 3（1/50）

（4）土坑（図 18，図版７－４）

土坑は 1 基検出した。

Ｇ－１・２グリッドに位置する。不整形を呈し、長軸 2.41m 以上×短軸 2.27m、深さ 75㎝程度を測る。西側の一部がフラスコ状を呈しているため、貯蔵用に築造された可能性がある。周囲を取り巻くようにある溝については、遺構検出時の覆土の色調の違いから、土坑よりも新しい時期の

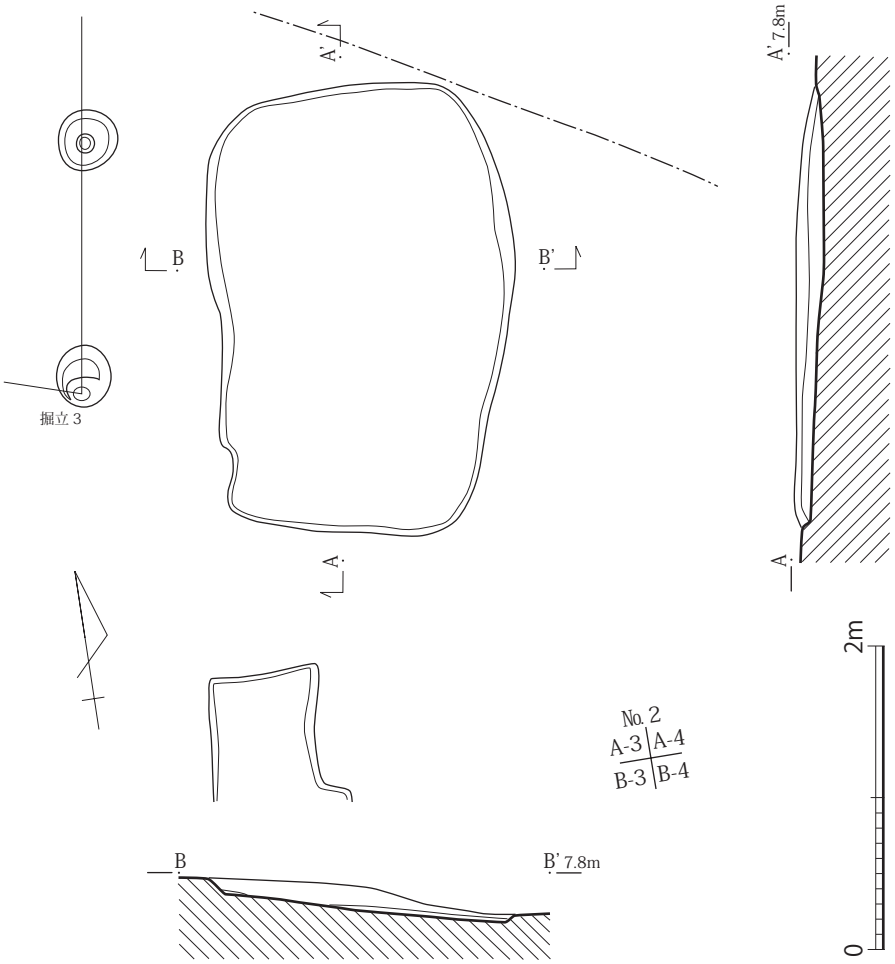


図 17　長井丸尾遺跡　竪穴（1/50）

畦畔跡と考えている。

出土遺物（図 19 － 14，図版８）

石器（14）

14 は磨石で、長さ 11.5㎝・幅 4.8㎝・厚さ 3.6㎝・重量 365.25g。

その他に、弥生土器・土師器及び須恵器の小片、姫島産黒耀石製の剥片が出土している。

（５）ピット出土遺物（図 19 － 15，図版８）

石器（15）

15 は石剣片である。尖端部及び中央部以下を欠損し、残存長 4.85㎝・残存幅 2.1㎝・厚さ 0.6㎝・重量 7.27g、滑石製。ピット 28（図 14）出土。

（６）表土他出土遺物（図 19 － 1 ～ 13・16，図版８）

須恵器（１～５）

１は坏蓋で、残存高 3.35㎝を測る。攪乱 1 出土。２は坏蓋で、残存高 3.25㎝を測る。攪乱 1 出土。３は坏身で、復原口径 12.2㎝・残存高 4.1㎝を測る。攪乱 2 出土。４は坏身で、復原底径 5.8㎝・残存高 2.05㎝を測る。西側表土出土。５は坏身で、復原底径 3.8㎝・残存高 1.65㎝を測る。攪乱 1 出土。

土師器（６・７）

６は甕の口縁部で、残存高 7.35㎝を測る。攪乱 1 出土。７は甑の把手である。攪乱 1 出土。

弥生土器（８）

８は小形の壺で、胴部最大径 9.45㎝・残存高 5.8㎝を測る。遺物包含層出土。

石器（9 ～ 13・16）

9・10 は脚部を欠損する石鏃である。9 は、長さ 1.6㎝・幅 1.25㎝・厚さ 0.3㎝・重量 0.41g、漆黒色の黒耀石製。北側表土出土。10 は、長さ 1.8㎝・幅 1.0㎝・厚さ 0.2㎝・重量 0.26g、漆黒色の黒耀石製。遺物包含層出土。11 は楔形石器で、長さ 2.3㎝・幅 1.8㎝・厚さ 0.6㎝・重量 2.55g、漆黒色の黒耀石製。攪乱 2 出土。9 ～ 11 の黒耀石は、伊万里湾周辺に産出するものと考えられる。12 はスクレイパーで、長さ 2.6㎝・幅 2.0㎝・厚さ 0.6㎝・重量 2.50g、珪質岩製。西側表土出土。

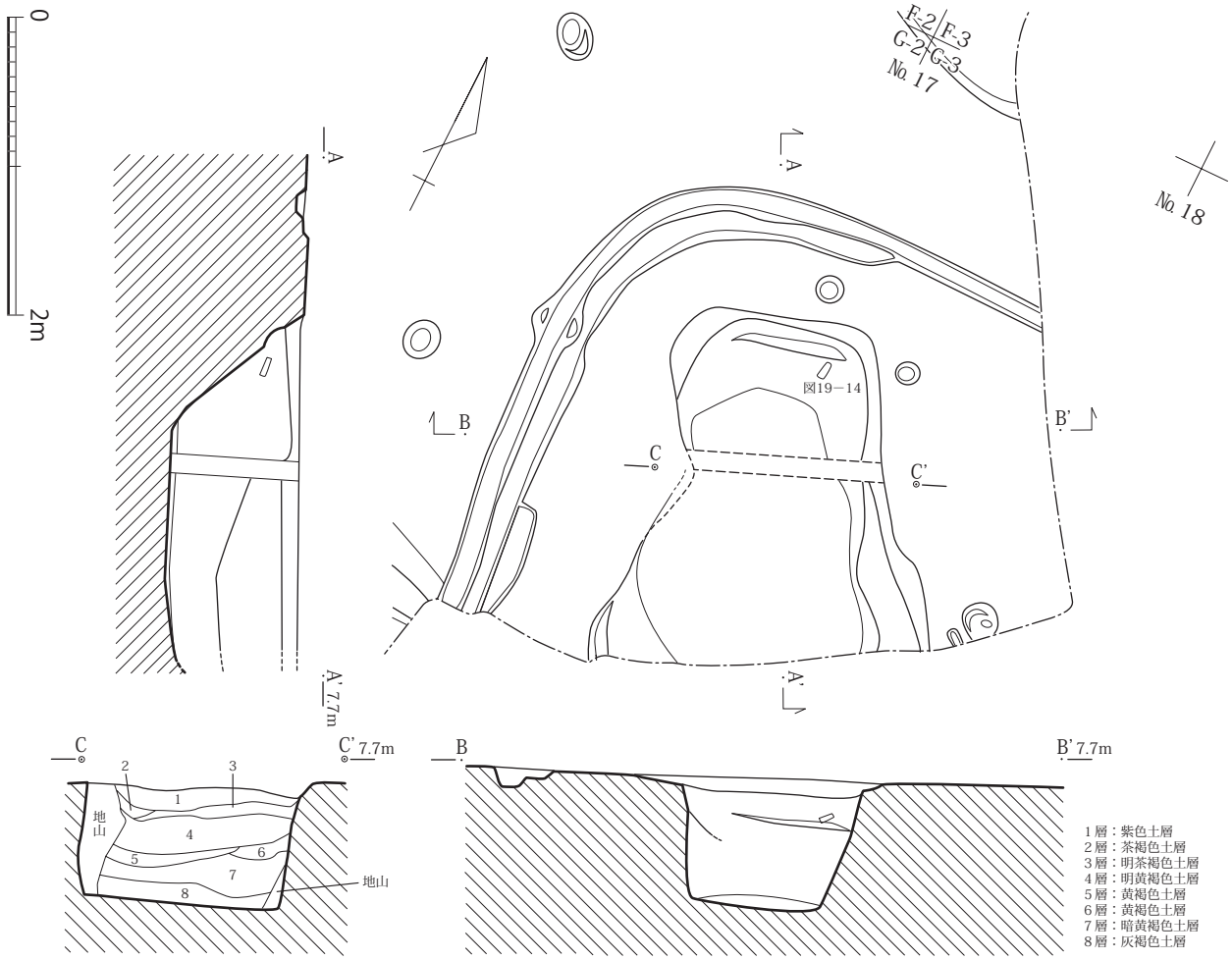


図 18　長井丸尾遺跡　土坑（1/50）

番　号	出土地	種　別	器　種	法　量（cm）	調　　整	焼　成	胎　　土	色　　調	残　存	備　　考
図9-1	竪穴住居跡1	土師器	甑	残存高10.8	内 ナデ 外 ナデ→タテハケ	良　好	1～3㎜の粗砂を多く含む	内 明黄褐10YR 7/6 外 明黄褐10YR 6/8	胴部片	かまど内出土
図9-2	〃	〃	甕	復原口径17.8 残存高6.55	内外 ナデ	良　好	微細～ 1.5㎜の白色砂を含む	内外 にぶい黄橙10YR 7/4	口縁部 1/2	
図11-1	竪穴住居跡2	須恵器	坏身	口径12.6　底径5.2 器高3.4	内外 回転ナデ	不　良	微細な白色砂粒，1～2㎜の砂粒を含む	内 にぶい黄橙10YR 7/3 外 灰黄2.5Y 7/2	口縁部 1/3欠	
図11-2	〃	〃	埦身	復原底径8.7 残存高1.35	内 回転ナデ 外 回転ヘラ切り，高台ナデ付	良　好	微細な白色砂粒，1～2㎜の砂粒を含む	内外 灰白5Y 7/1	底部 1/3	
図11-3	〃	縄文土器	粗製深鉢	残存高8.85	内 条痕調整 外 条痕調整→ナデ	良　好	微細～ 3㎜の砂粒，黒雲母を少量含む	内 にぶい黄橙10YR 6/3 外 橙7.5YR 6/6	口縁部片	石囲い土器炉に使用
図11-4	〃	〃	粗製深鉢	残存高19.4	内外 二枚貝条痕調整	やや不良	微細～ 4㎜の砂粒，黒雲母を含む	内外 にぶい黄褐10YR 5/4	頸部～胴部片	石囲い土器炉に使用
図11-5	〃	〃	粗製深鉢	残存高5.4	内 巻貝条痕調整 外 条痕調整	良　好	微細～ 8㎜の砂粒，黒雲母を少量含む	内 淡黄2.5Y 8/4 外 にぶい黄橙10YR 7/4	胴部片	石囲い土器炉に使用
図11-6	〃	石　器	スクレイパー	器長2.9　器幅3.85 器厚0.95　重量10.78g	—	—	—	—	完形	姫島産黒耀石製 柱穴 12 出土
図11-7	〃	〃	スクレイパー	器長6.05　器幅13.4 器厚0.9　重量81.44g	—	—	—	—	完形	安山岩製
図11-8	〃	〃	打製石斧	器長12.2　器幅6.6 器厚1.25　重量131.63g	—	—	—	—	ほぼ完形	緑色片岩製
図11-9	〃	〃	磨製石斧	器長9.9　器幅5.0 器厚1.55　重量119.43g	—	—	—	—	完形	ホルンフェルス製
図13-1	竪穴住居跡3	土師器	高坏	口径15.3　残存高3.9	内 ナデ 外 ナデ，指頭痕	良　好	微細～ 5㎜の砂粒を含む	内外 橙5YR 6/8	坏部 3/4	かまど支柱
図19-1	撹乱1	須恵器	坏蓋	残存高3.35	内外 回転ナデ	良　好	微細な砂粒を含む	内 灰N 6/ 外 オリーブ黒 7.5Y 3/2	口縁部片	
図19-2	〃	〃	坏蓋	残存高3.25	内外 回転ナデ	良　好	1㎜程度の砂粒を含む	内 灰N 5/ 外 灰7.5Y 5/1	口縁部片	
図19-3	撹乱2	〃	坏身	復原口径12.2　残存高4.1	内 回転ナデ 外 口縁部調整ナデ，回転ナデ	良　好	微細な砂粒を含む	内 灰7.5Y 5/1 外 灰N5/	口縁～体部下位 1/4	
図19-4	西側表土	〃	坏身	残存高2.05　復原底径5.8	内 回転ナデ 外 回転ヘラケズリ，回転ナデ	良　好	微細～ 2㎜の砂粒を含む	内外 灰10Y 6/1	底部 1/2	
図19-5	撹乱1	〃	坏身	残存高1.65　復原底径3.8	内 回転ナデ 外 回転ヘラケズリ，回転ナデ	良　好	微細～ 2㎜の砂粒を含む	内外 灰7.5Y 6/1	底部 1/3	
図19-6	〃	土師器	甕	残存高7.35	内外 ナデ	良　好	微細～ 2㎜の砂粒を含む	内 明黄褐10YR 7/6 外 明黄褐10YR 6/6	口縁～胴部片	
図19-7	〃	〃	甑	残存高4.6	内 ナデ 外 指頭痕	良　好	微細～ 2㎜の砂粒を含む	内 浅黄橙10YR 8/4 外 浅黄橙10YR 8/3	把手部	
図19-8	遺物包含層	弥生土器	壺	胴部最大径9.45 残存高5.8	内外 ナデ	良　好	微細～ 2㎜の砂粒を含む	内 にぶい赤褐 5YR 4/4 外 明赤褐 5YR 5/6	口縁・底部欠	
図19-9	北側表土	石　器	石鏃	器長1.6　器幅1.25 器厚0.3　重量0.41g	—	—	—	—	脚部欠	伊万里湾周辺産黒耀石製
図19-10	遺物包含層	〃	石鏃	器長1.8　器幅1.0 器厚0.2　重量0.26g	—	—	—	—	脚部欠	伊万里湾周辺産黒耀石製
図19-11	撹乱2	〃	楔形石器	器長2.3　器幅1.8 器厚0.6　重量2.55g	—	—	—	—	完形	伊万里湾周辺産黒耀石製
図19-12	西側表土	〃	スクレイパー	器長2.6　器幅2.0 器厚0.6　重量2.50g	—	—	—	—	完形	珪質岩製（黄褐色）
図19-13	撹乱1	〃	石核	器長4.35　器幅2.8 器厚0.6　重量44.87g	—	—	—	—	完形	珪質岩製（瑪瑙色）
図19-14	土坑	〃	磨石	器長11.5　器幅4.8 器厚3.6　重量365.25g	—	—	—	—	完形	
図19-15	ピット28	〃	石剣	残器長4.85　残器幅2.1 残器厚0.6　重量7.27g	—	—	—	—	尖端・中央部以下欠	滑石製
図19-16	西側表土	〃	磨製石斧	残器長9.35　残器幅4.05 残器厚2.45　重量87.73g	—	—	—	—	1/2	蛇紋岩製

表３　長井丸尾遺跡出土遺物観察表

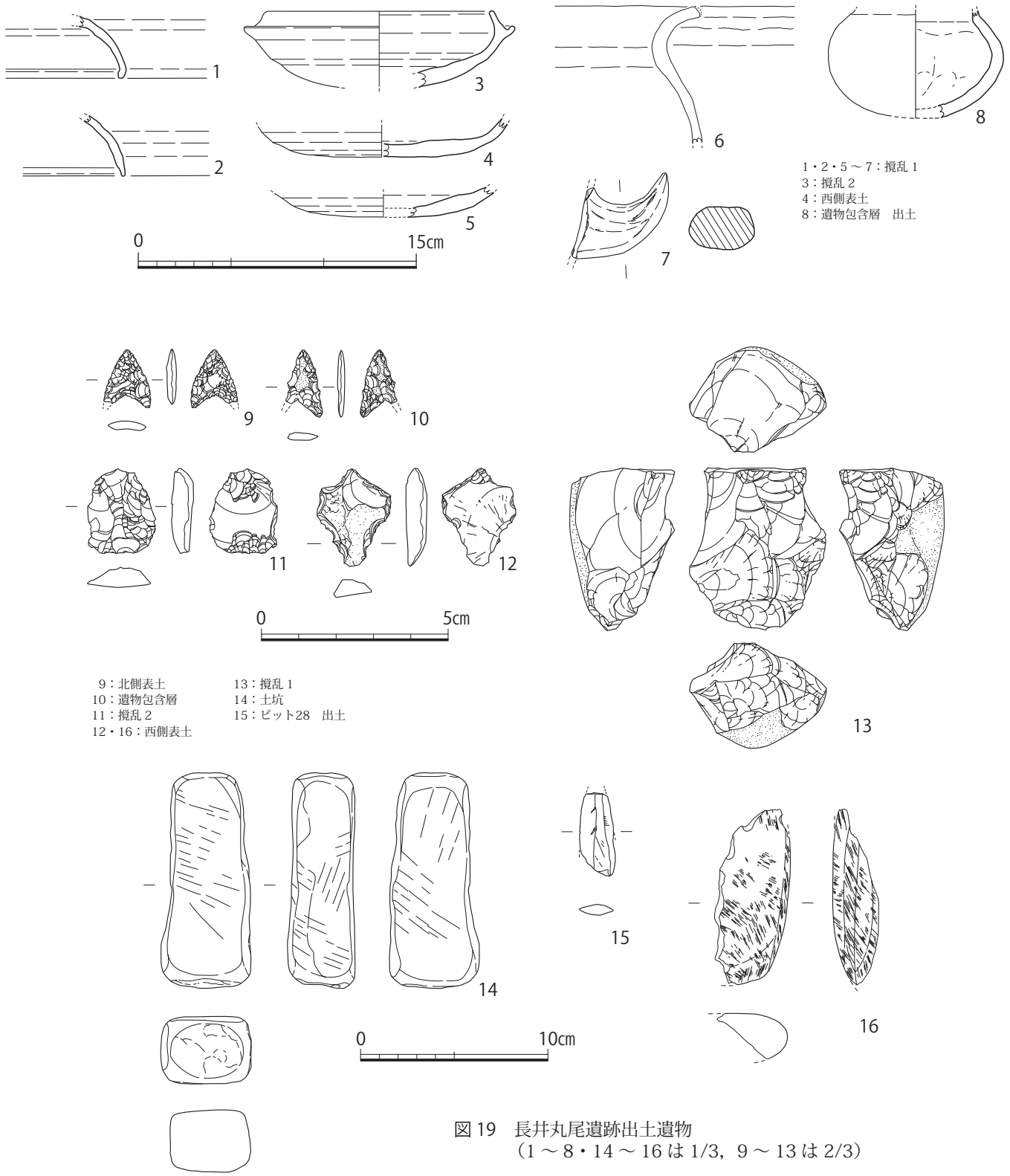


図 19　長井丸尾遺跡出土遺物
（1 ～ 8・14 ～ 16 は 1/3，9 ～ 13 は 2/3）

13 は石核である。長さ 4.35㎝・幅 2.8㎝・重量 44.87g、珪質岩製。攪乱 1 出土。12・13 は後期旧石器時代の所産であろう。16 は磨製石斧である。約半分を欠損し、残存長 9.35㎝・残存幅 4.05㎝・厚さ 2.45㎝・重量 87.73g。蛇紋岩製。西側表土出土。

その他、姫島産黒耀石製・ガラス質安山岩製及び珪質岩製の剥片、土師質の管状及び棒状土錘の小片、陶磁器・擂鉢及び瓦の小片が出土している。

Ⅳ　おわりに

長井尾ノ花遺跡及び長井丸尾遺跡の発掘調査は、２遺跡合わせても 1,000㎡足らずの狭い調査範囲でありながら、以下のような成果を挙げることができた。

長井尾ノ花遺跡では、竪穴住居跡１軒・土坑１基等を確認した。

竪穴住居跡は、非常に削平が激しく原形を留めていない状態であったが、もともとは方形を呈していたとみられる。屋内土坑に、古式土師器の甕が納められていたことから、古墳時代前期の時期であろう。土坑については、弥生時代の所産であると考えている。

長井丸尾遺跡では、竪穴住居跡４軒・掘立柱建物跡３棟・竪穴１基・土坑１基等を確認した。

竪穴住居跡４軒のうち１軒（２－ｂ）は、石囲い土器炉を有していた。炉の底面に置かれていた土器から、縄文時代後期のものと考えられる。石囲い土器炉が採用される時期は、鐘崎式の新段階から北久根山式併行期にかけてであり（註１）、本住居跡もこの時期に属する可能性がある。近隣では、豊前市の挟間宮ノ下遺跡８号住居跡例（文献１・２）がある。２－ａに破壊されたにもかかわらず、石組遺構や同時期の遺物とみられる石器も残されていた。行橋市内において縄文時代の竪穴住居跡が確認されたのは、後期末頃の長者原遺跡第二次調査１号竪穴（文献３）に続いて２例目である。

残りの３軒については、かまどの痕跡が認められる。竪穴住居跡１はＬ字状かまどを備えており、この形態のかまどは部分的に床暖房を行っていたオンドル住居と考えられている。これも行橋市内で確認されたのは、渡築紫遺跡Ｃ区（註２）に次いで２例目である。竪穴住居跡２－ａについては、かまど付近の床面より、豊前地域の須恵器編年（文献４）のⅣ期の須恵器の坏蓋が出土していることから、７世紀前半頃（古墳時代終末期前半頃）の時期であると考えられる。また、周辺からは、同じくⅢ－３～Ⅶ－１期頃の須恵器が出土していることから、３軒の竪穴住居跡は、６世紀後半～７世紀末頃（古墳時代後期後半～終末期後半）の集落であると考えている。総柱の掘立柱建物跡２も同時期のものであろう。

引用参考文献

（１）棚田昭仁・坂梨祐子 2000.3『挟間宮ノ下遺跡（遺構編）』豊前市文化財調査報告書第 13 集

（２）栗焼憲児・棚田昭仁・坂梨祐子 2001.3『挟間宮ノ下遺跡（遺物編）』豊前市文化財調査報告書第 14 集

（３）小池史哲・飛野博文ほか 2000.3『寄原遺跡・長者原遺跡』福岡県文化財調査報告書第 146 集

（４）小田富士雄・長直信 2006.3「豊前地域の須恵器生産」『行橋市史』資料編 原始・古代 500 ～ 535 頁 行橋市・行橋市史編纂委員会

註

（１）小池史哲氏のご教示による。

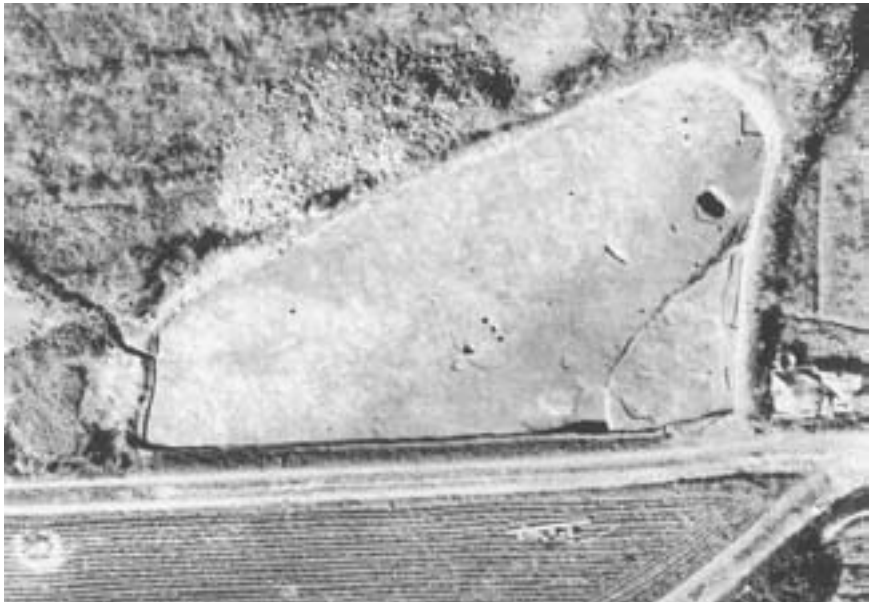
（２）1999 ～ 2000 年度に行橋市教育委員会が調査。

写　真　図　版

1．長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡遠景（覗山から）

2．長井尾ノ花遺跡調査前状況（南東から）

3．長井丸尾遺跡調査前状況（南東から）



4．長井尾ノ花遺跡航空写真（真上から）

１．長井尾ノ花遺跡 竪穴住居跡（南から）

２．長井尾ノ花遺跡 竪穴住居跡遺物出土状況（北から）

３．長井尾ノ花遺跡 土坑（北から）

４．長井尾ノ花遺跡 土坑遺物出土状況（北から）

1．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１（南から）

2．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１Ｌ字状かまど（南から）

3．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１かまど（南から）

4．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１土層（南から）

１．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１かまど土層西側（南から）

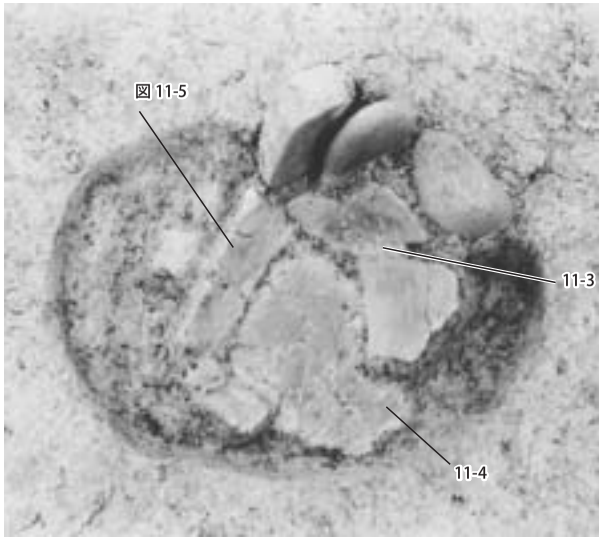
２．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１かまど土層東側（南から）

３．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡１Ｌ字状かまど土層（東から）

４．長井丸尾遺跡 竪穴（東から）

1．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２（南から）

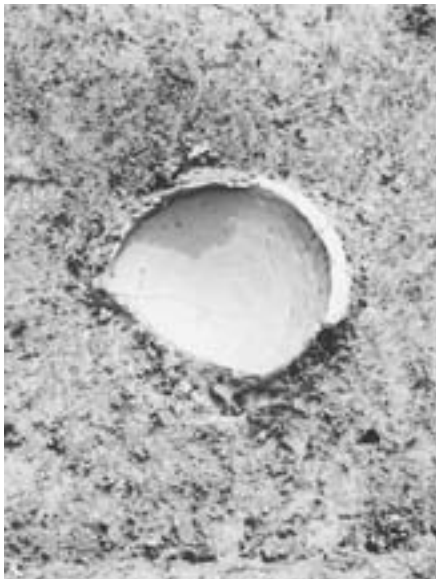
2．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２土層（南から）



3．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ｂ炉（東から）

4．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ｂ石組１（西から）

5．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡２―ｂ石組２（西から）



１．長井丸尾遺跡　竪穴住居跡２－ａ
遺物出土状況１（遺物番号１，北から）

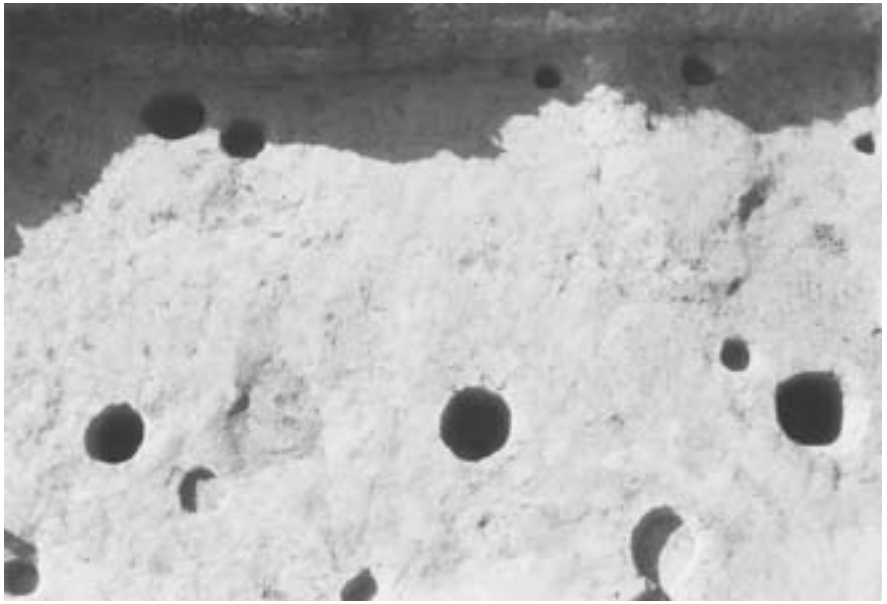
２．長井丸尾遺跡　竪穴住居跡２－ａ
遺物出土状況２（遺物番号２，南から）

３．長井丸尾遺跡　竪穴住居跡２－ｂ
遺物出土状況１（遺物番号７，北から）

４．長井丸尾遺跡　竪穴住居跡２－ｂ
遺物出土状況２（遺物番号９，東から）

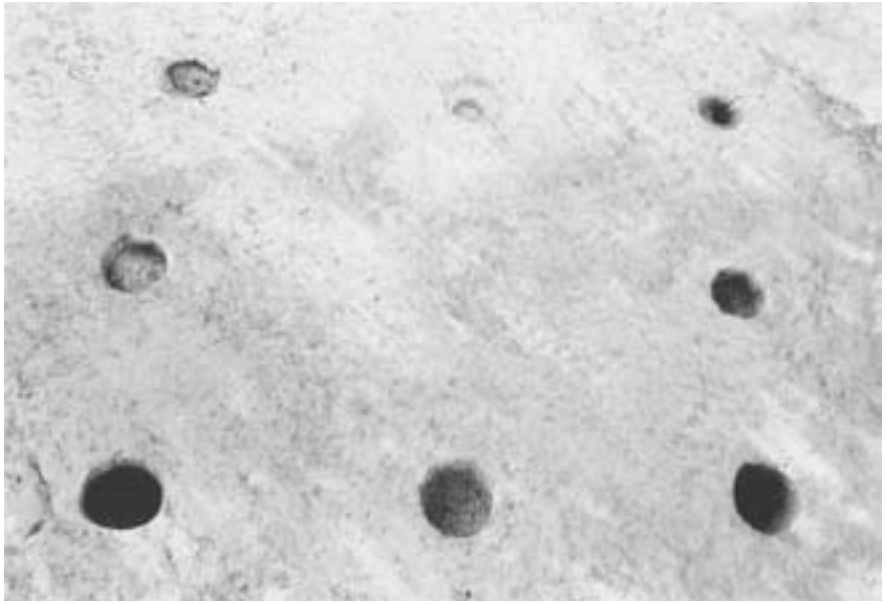
５．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡３（東から）

６．長井丸尾遺跡 竪穴住居跡３かまど（南から）



1．長井丸尾遺跡 掘立柱建物跡１（東から）

2．長井丸尾遺跡 掘立柱建物跡２（北から）



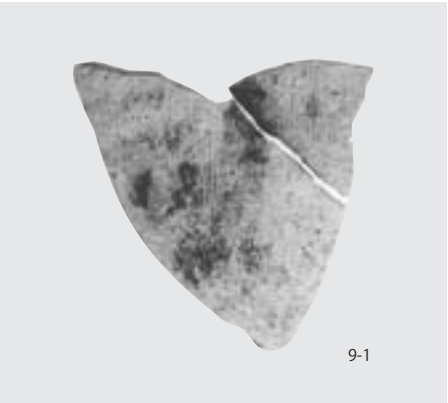
3．長井丸尾遺跡 掘立柱建物跡３（東から）

4．長井丸尾遺跡 土坑土層（南から）

図版８

6-1

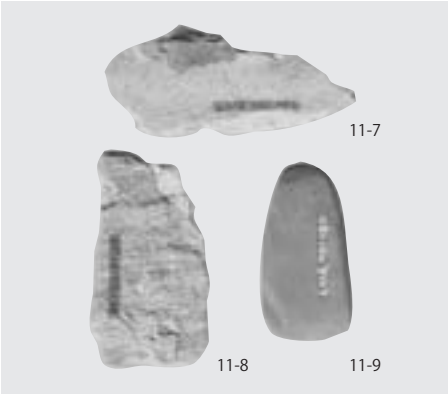
6-2

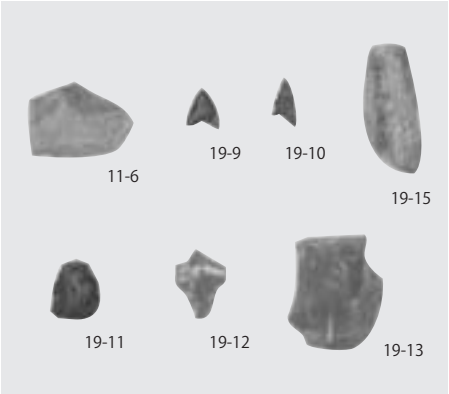

9-1

9-2

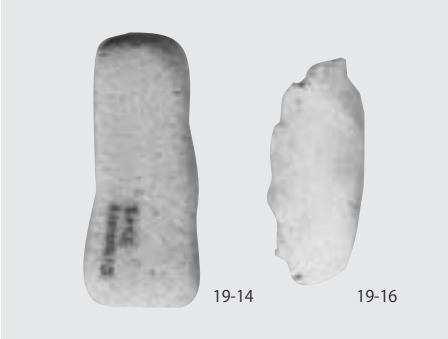
11-1

11-2

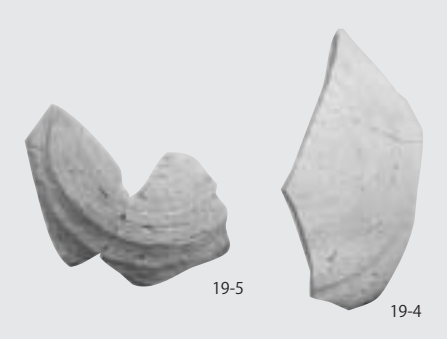

11-7
11-8
11-9

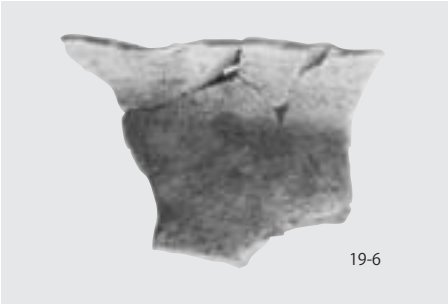

11-6
19-9
19-10
19-15
19-11
19-12
19-13

13-1


19-14
19-16

19-3


19-5
19-4


19-6

19-7

19-8

長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	ながいおのはないせき・ながいまるおいせき
書　　名	長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡
副 書 名	
シ リ ー ズ 名	行橋市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 39 集
編 著 者 名	伊藤　昌広
編 集 機 関	行橋市教育委員会
所　在　地	〒 824-8601 福岡県行橋市中央一丁目 1 番 1 号
発 行 年 月 日	2011 年（平成 23 年）3 月 22 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ながいおのはないせき 長井尾ノ花遺跡	ふくおかけんゆくはししおおあざ 福岡県行橋市大字 ながいあざおのはな 長井字尾ノ花 899	402133	14051008	33° 42’50”	131° 01’ 15”	20041004 ～ 1220	315	基盤整備促進事業 （長井第二地区）
ながいまるおいせき 長井丸尾遺跡	ふくおかけんゆくはししおおあざ 福岡県行橋市大字 ながいあざまるお 長井字丸尾 752 ほか	402133	14051011	33° 42’36”	131° 01’ 22”	20041004 ～ 1220	670	基盤整備促進事業 （長井第二地区）

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長井尾ノ花遺跡	集落跡	弥生時代	土坑 1 基	弥生土器	
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 1 軒	古式土師器	
長井丸尾遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 1 軒	縄文土器・石斧・スクレイパー・石鏃	縄文時代後期の竪穴住居跡 1 軒を確認。古墳時代後期～終末期のオンドル住居を 1 軒確認。
	集落跡	弥生時代	ピット	石剣片・弥生土器	
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 3 軒 掘立柱建物跡 1 棟	須恵器・土師器	

要　　約	行橋市の東部、周防灘を望む標高 5 ～ 8 m の中位段丘上に立地する。 長井尾ノ花遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居跡 1 軒等を検出。 長井丸尾遺跡では、縄文時代後期の集落の一部及び古墳時代後期～終末期の集落等を検出。

長井尾ノ花遺跡・長井丸尾遺跡

行橋市文化財調査報告書　第39集

平成23年（2011年）3月22日

発行　行橋市教育委員会
福岡県行橋市中央一丁目1番1号

印刷　株式会社 文信堂印刷所
福岡県行橋市西宮市二丁目20番22号